『比較論理学研究』第 11 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2013)

Avadānakalpalatā におけるクシェーメーンドラの著作姿勢について —「ヴァーサヴァダッターの教化」を中心に—*

山崎一穂

1 はじめに

Kṣemendra (11 世紀) の仏教説話集成 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (『菩薩のアヴァダーナの如意の蔓草』、Av-klp) 第 59、69–74 章はアショーカ王伝説の叙述に充てられている[1]。うち第 72 章 Upagupta はアショーカ王の仏教帰依に大きな役割を果たしたウパグプタの物語に当たる。同章は 72 詩節から構成され、内容上「ヴァーサヴァダッターの教化」(vv. 1–39)、「マーラの調伏」(vv. 40–72) の二部に分かれる。同章の材源が漢訳『阿育王経』の祖形 **Aśokarājasūtra* に収められていたであろう並行話と最も親密な関係にあることは拙論で論じた通りである[2]。

Av-klp 所収のアショーカ王伝説はその成立過程、材源問題上特異な第 59 章を除き各章 20–30 詩節程度で構成されている。第 72 章のみが長い内容を伝える理由として、材源とされた物語が遊女の教化を主題とする点などで Kṣemendra の文学的嗜好に合っていたことが考えられる。しかし彼は物語を自由に翻案している訳ではなく骨組みを忠実に再現している。従って当該章から Kṣemendra 独自の敷衍と考えられる箇所を抽出することは困難ではない。

近年 Kṣemendra の文学作品、特に教訓詩への関心の高まりと共に Av-klp を文学作品的な視点から考察する研究も現れ始めた。FORMIGATTI [2005] はこうした背景から発表されたものである。しかし FORMIGATTI [2005] は Kṣemendra の文学的嗜好云々を議論する前段階に扱われねばならない、「Av-klp の説話材源は何に求められるか」という問題を十分に検討していない[3]。また Kṣemendra

*本論は日本学術振興会特別研究員奨励費 (25·10048) による成果である。本論を著すに際し九州大学の岡野潔先生からケンブリッジ大学所蔵写本 A、東北大学所蔵ダライラマ五世版、片岡啓先生からネパール・カトマンドゥの National Archives 収録写本 E の複写を頂いた。また松村淳子先生、京都大学の横地優子先生、広島大学の川村悠人氏からは Av-klp 第 72 章第 1–39 詩節その他に関する筆者の誤訳箇所に関し御教示を賜った。記して御礼申し上げる。

[1]以下「アショーカ王伝説」、「アショーカ王伝」という呼称を用いるが、これは「アショーカ王の一代記」を指すのではなく松村 [1992: 459] が言う「漢訳『阿育王伝』、『阿育王経』が伝えるテキストとその一部に対応する *Divyāvadāna* 所収の断片及びこれらの派生物」を指すものであることをお断りしておく。

[2]拙論「ウパグプタのマーラ調伏物語—*Avadānakalpalatā* と *Lokapaññatti* の伝承を中心—」『比較論理学研究』9 (2011): 63–84; "Buddhist Avadāna Literature in Medieval India: The Legends of the Elders in the *Avadānakalpalatā* and the *Aśokāvadānamālā*, " *JIBS* 62-3 (forthcoming).

[3]例えば "As for the legend itself, the *Su-A* (scil. Sundarīnandāvadāna in the Av-klp) takes as its source the version of the MSV (scil. *Mūlasarvāstivādavinaya*), whereas the *Saund.* (scil. *Saundarananda*) is based mainly on the version of the *Jāt.* (scil. *Jātaka*) and the *Dhp-a.* (*Dhammapadaṭṭhakathā*)" (p. 160) という発言が根拠もなく提示されている。"For the purpose here references are made only to the Indian sources and their Tibetan translations." (p. 157) と言って漢訳資料の検討を怠った結果によるものであろう。

が前提としていたであろう詩論や荘厳法 (alaṃkāra) に関する議論を全く踏まえないのでその論旨に説得力を欠いている。本論の目的は、Av-klp 第 72 章 Upagupta の前半部「ヴァーサヴァダッターの教化」における Kṣemendra の創作・敷衍箇所に注目し、そこに見出される荘厳法の用例を主に 8–11 世紀カシミールの詩論家の理論と照合し彼の著作姿勢を明らかにすることにある。

2 先行研究

北伝仏教が伝承する仏伝・アヴァダーナをヒンドゥー教古典美文学の規範に従い改稿した作品を「仏教美文作品」と呼ぶならば、これらを荘厳法・詩論的視点から考察した研究は Aśvaghoṣa (二世紀) の作品を例外として皆無に等しい。これには二つ理由が考えられる。第一は仏教美文作品の大半が蔵訳もしくは二次的な作品への引用という形でしか残存せず、梵本が残っていても現行刊本に問題があり再校訂抜きに利用出来ないことが挙げられる。テキストが復元出来ない以上荘厳法云々を議論すること自体困難なのである。第二は仏教美文作品研究の多くが個々の著作家が基づいた物語材源の解明を目的とし、荘厳法・詩論的立場という作風に関する問題の考察は研究者の興味を惹かなかったことが考えられる。本論に取り上げる Av-klp も例外ではない。

近年 Av-klp 第 64 章 Sudhanakinnarī (「スダナ太子とキンナリー」) の校訂・翻訳研究を発表した STRAUBE [2006] は序論の一節 (pp. 35–38) を同章における Kṣemendra の表現法の分析に充てている。彼は同章に顕著な荘厳法として〈頭韻〉(anuprāsa) と〈掛詞〉(śleṣa) を挙げ次の特徴を指摘する。

(1) Kṣemendra が用いる〈頭韻〉は大抵自由なものであり、詩節の意味内容との直接的な関わりを持たず、意味のまとまりを飛び越える形で適用されている。しかし時折、例えば残酷な人物や邪悪な人物を硬い子音と混合した詩節を用いて描くというように、詩節に表現される内容を補足、補強する〈頭韻〉が意図的に組み込まれている。

(2) 〈掛詞〉への偏向は Kṣemendra の文体上のもう一つの特徴である。この〈掛詞〉は場合によっては詩節全体ではなく、若干の語群に適用されるに留まっていることがある。

また STRAUBE [2006] は、以上の荘厳法が程度の差はあれ梵語美文作品に全般的に認められ得るものであるのに対し、Kṣemendra に特徴的な点として次の点を挙げる。

(3) Kṣemendra は随所に処世哲学に関する詩節をちりばめており、人間一般の営みや振る舞いを論じ批判し一般概念化し更に嘲るという自身の才能を示している。

以上の三点を指摘し彼は次のように総括する。

> Kṣemendra は流麗であって且つ大抵明晰な言葉で著述をなしている。そして彼の言葉は梵語の語彙、文法、韻律への見事な熟達及び梵語詩に関する理論や決まり事についての深い知識を示している。しかし多くの表現に多義を込め、題材を凝縮、簡潔化して提示しているので、それが意味する所全体を理解するためには彼の物語は時間をかけ注意深く読んで行く必要がある[4]。

[4] STRAUBE [2006: 38] „Kṣemendra schreibt in einer flüssigen und zumeist klaren Sprache, die eine souveräne Beherrschung von Lexik, Grammatik und Metrik des Sanskrit sowie profunde Kenntnisse der Theorien und Konventionen der Sanskritdichtung verrät. Aufgrund der vielen mehrdeutigen Ausdrücke und der kompakten und konzisen Darbietung der Stoffes, erfordert seine Erzählung jedoch eine langsame und aufmerksame Lektüre, um sie in ihrer ganzen Bedeutung zu erfassen.“

STRAUBE [2006] の分析は Av-klp を荘厳法・詩論的観点から考察する上での出発点となることに間違いない。しかし STRAUBE [2006] の分析は次の点で十分とは言い難い。

(i) (1)(2) について、STRAUBE [2006] が言う〈頭韻〉、〈掛詞〉が如何なる詩論家の定義するものであるのか明確でない。荘厳法の中には Bhāmaha、Daṇḍin に代表される初期の詩論家と Rudraṭa (九世紀) に代表される詩論家で定義、分類を異にするものもある[5]。

(ii) (3) について STRAUBE [2006] が„Lebensweisheit“と呼ぶものは〈対比物提示〉(arthāntaranyāsa) という荘厳法に分類すべきである。確かにこれは Kṣemendra の作風の一つに数えられるにせよ„eine persönliche Note“と見做され得るものであるか疑問である。

(iii) 「梵語詩に関する理論や決まり事についての深い知識」(profunde Kenntnisse der Theorien und Konventionen der Sanskritdichtung) というものの、Kṣemendra が誰の詩論体系を知っており、それに対して如何なる姿勢をとっていたのかという問題に対する答えは与えられていない。

(ii) に関し Kṣemendra が自作品で〈対比物提示〉を頻繁に用いていたことについては拙論で論じた通りであり[6]、この事実は付論の和訳内容からも裏付けられ得る[7]。一方 (i)(iii) を検討することは Kṣemendra の著作姿勢の解明という本論の目的と密接に関係すると考えられる。以下「ヴァーサヴァダッターの教化」を基にこれら二点について考察を進めよう。

3 荘厳法から見た Kṣemendra の著作姿勢

3.1 〈意味の荘厳法〉との関係

Av-klp 第 72 章第 23–39 詩節は手足を断たれ火葬場に捨てられたヴァーサヴァダッターをウパグプタが訪れる場面の描写に充てられている。瀕死のヴァーサヴァダッターは以前に自分の誘いを断っておきながら死の間際になって自分を訪れたウパグプタに憾みを述べる (vv. 23–30)。しかし彼は身体が無常であることを説き (vv. 31–36)、それを聞いた彼女は預流果を得て絶命し天界に再生する (vv. 37–39)。Kṣemendra はこの一連の箇所で詩的彫琢を行っており同箇所は彼の Av-klp に対する著作姿勢を理解する上で重要な示唆を我々に与える。本論ではその一例として第 33、36 詩節を見よう[8]。

[Av-klp 72.33]
bata bata nihatās te $^{(a)}$*kīrṇakeśāsthisaṃsthe* satatam $^{(b)}$*analatāpotpacyamānākhilāṅge* |
$^{(c)}$*kuṇapavati* ramante ye jugupsānidhāne vyasanagaṇavidhāne *kāya*nāmni *śmaśāne* ||

---

[5]Bhāmaha と Daṇḍin の年代を確定するのは困難である。DIMITROV [2002: 11–24] はシンハラ語、カンナダ語、タミル語に翻案もしくは翻訳された *Kāvyādarśa* (『詩の鏡』) の編纂年代に基づき Daṇḍin の活躍年代の下限を九世紀初頭に推定する。他方年代の上限については「Bhāmaha は Daṇḍin よりも遥か以前に生きていたであろう」と述べ次のように結論付ける。「各々について十分には証明力のない間接証拠を総合すると、Daṇḍin が Bhaṭṭi、Bāṇa、文法家 Bhartṛhari 及び Māgha 以降、故に七世紀半ばより前には活躍した人物ではなかったであろうことが示唆される」と。この年代推定には賛同し難い点もある。例えば Bāṇa は *Caṇḍīśataka* (『チャンディー女神百頌』) 第 62 詩節に〈名詞・定動詞接辞による掛詞〉(vibhaktiśleṣa) を用いている。しかし Daṇḍin はこの荘厳法に言及せず、Rudraṭa に至って初めて言及される。Daṇḍin が Bāṇa 程の詩人を知っていたならばこの荘厳法を *Kāvyādarśa* で説明していておかしくないはずである。また Bhaṭṭi と Bhāmaha、Daṇḍin の前後関係については議論がある。その詳細については川村 [2013] を参照せよ。

[6]拙論「クシェーメーンドラの仏教説話に見られる文学技巧について—「クナーラ・アヴァダーナ」を中心に—」『哲学』61 (2009): 115–128.

[7]付論和訳研究第 14、24–25 詩節を参照せよ。

[8]当該詩節に対する訳註については付論和訳研究を参照せよ。

「身体と呼ばれるものは、(a)〔そこから生える〕髪は乱れ、骨に張り付いており、(b)〔消化の〕火の熱で四肢全体が絶えず熱せられており、(c)汚物を宿し、嫌悪が向けられるものであり、一群の不幸を生み出す。〔そんな身体は〕火葬場に他ならない。〔というのも、火葬場もそこに転がる屍の〕(a)′髪が散らかり、骨と共にあり、(b)′〔火葬の〕火の熱で〔そこに転がる屍の〕四肢全体が絶えず炙られており、(c)′死屍累々たる、嫌悪が向けられるものであり、一群の不幸を生み出すから。〔そこに〕喜びを覚えるのは、あぁ、殺されてしまった者達だ。」

[Av-klp 72.36]
mohadhvāntadivākarasya sakalakleśāvakāśacchidaḥ
śāstuḥ śāsanasaṃśraye praṇihitaṃ kalyāṇamitrasya yaiḥ |
naiva (d)*klinnakaraṅkapaṅkakalite* (e)*kīrṇāntramālākule*
te majjanti vikārabhāji *narake kāyā*bhidhāne punaḥ ||

「師は迷妄という暗闇を照らす太陽であり、あらゆる苦のきっかけを断ずる善き友である。彼の教えという身の寄せ場に心を向ける者というのは、(d)〔体液で〕湿った頭蓋骨と過失を宿し、(e)〔体内の〕四方八方に広がる一続きの腸で満ち、醜く姿が変わっていくことを免れない身体という名を持つ所に二度と沈むことは決してない。〔その身体は〕(d)′腐った頭蓋骨が浮かぶ泥沼を具え、(e)′飛散している一続きの腸でいっぱいで、〔そこに堕ちた者の〕姿が醜く変わって行くことを免れない地獄に他ならない。」

Kṣemendra は第 33 詩節 d 句、第 36 詩節 d 句にそれぞれ kāyanāmni śmaśāne「身体と呼ばれる火葬場」、narake kāyābhidhāne「身体と呼ばれる地獄」という〈隠喩〉(rūpaka) を用いている。更にそれぞれ第 33 詩節の (a) kīrṇakeśāsthisaṃsthe、(b) analatāpotpacyamānākhilāṅge、(c) kuṇapavati、第 36 詩節の (d) klinnakaraṅkapaṅkakalite、(e) kīrṇāntramālākule に〈隠喩〉の比喩基準・比喩対象を限定する二義を与えている。それらの対応を表に示すと次の通りである。

表 1: 第 33 詩節

	身体 (kāya)	火葬場 (śmaśāna)
(a)	髪が乱れ、骨に張り付いた	〔屍の〕髪が散らかり、骨と離れることがない
(b)	〔消化の〕火の熱で四肢全体が熱せられている	〔火葬の〕火の熱で〔火葬場の屍の〕四肢全体が炙られている
(c)	汚物 (kuṇapa) を宿す	死屍 (kuṇapa) 累々とした

表 2: 第 36 詩節

	身体 (kāya)	地獄 (naraka)
(d)	湿った (klinna) 頭蓋骨と過失 (paṅka) を宿す	腐った (klinna) 頭蓋骨が浮かぶ泥沼 (paṅka) を具えた
(e)	〔体内の〕四方八方に広がる (kīrṇa) 一続きの腸で満ちた	飛散している (kīrṇa) 一続きの腸でいっぱいの

この技法は詩論家 Daṇḍin が *Kāvyādarśa* 第二章第 87 詩節で定義、例示する〈掛詞を用いた隠喩〉に相当する。彼の定義と例は次の通りである[9]。

[9]詩節番号は THAKUR and JHA ed., Darbhanga: The Mithila Institute, 1957 に従う。Vāmana (八世紀) を始めとする詩論家は〈掛詞を用いた隠喩〉に言及せず、Mammaṭa (11 世紀後半) のみがこの荘厳法を取り上げる (GEROW [1971: 255])。彼が挙げる〈掛詞を用いた隠喩〉の用例とその構造を示すならば次の通りである (詩節番号・テキストは VASUDEVASHASTRI ed., Poona, 1921 に従う)。

[*Kāvyādarśa* 2.87]
$^{(f)}$*rājahaṃso*pabhogārhaṃ $^{(g)}$*bhramara*prārthyasaurabham |
sakhi *vaktrāmbujam* idaṃ taveti śliṣṭarūpakam ||

「愛しい女よ、$^{(f)}$最上の王達が楽しむに相応しく、$^{(g)}$伊達男達がその香りを強く求めるに違いない、君のこの顔は、$^{(f)'}$ラージャハンサ鳥が楽しむに相応しく、$^{(g)'}$蜂達がその香りを強く求めるに違いない蓮華である。」。以上が〈掛詞を用いた隠喩〉である。

以上の定義と例を Kṣemendra が Av-klp 第 72 章第 33、36 詩節に適用する〈掛詞を用いた隠喩〉の例と照合した場合、第 33 詩節では jugupsānidhāne、vyasanagaṇavidhāne の二箇所に、第 36 詩節では vikārabhāji の一箇所に Kṣemendra が意味の重複を許していることが指摘されよう。この事実を肯定的に解釈すれば Kṣemendra が詩論家の厳密な規定を意識せず自由な詩作を行っていたと言えよう。しかし否定的に解せば Kṣemendra が詩作能力の乏しさ故に意味の重複を許したとも考えられる。従って以上の〈掛詞を用いた隠喩〉の例のみから Kṣemendra の詩論上の姿勢を明らかにするには限界があると言わねばならない。

[*Kāvyaprakāśa* 425]
$^{(h)}$vidvan*mānasa*haṃsa $^{(i)}$vairi*kamalāsaṃkoca*dīptadyute
$^{(j)}$*durgāmārgaṇa*nīlalohita $^{(k)}$*samit*svīkāravaiśvānara |
$^{(l)}$*satyaprītividhānadakṣa* $^{(m)}$*vijayaprāgbhāvabhīma* prabho
sāmrājyaṃ varavīra vatsaraśataṃ vairiñcam uccaiḥ kriyāḥ ||

知者達の $^{(h)}$心という $^{(h)'}$マーナサ湖に棲むハンサ鳥であり、敵の $^{(i)}$繁栄を衰微させるという $^{(i)'}$蓮華の開花をもたらすので光燃え輝く者 (= スールヤ) であり、$^{(j)}$城塞を忌避するという $^{(j)'}$ドゥルガーの追求をなすので赤黒い者 (= シヴァ) であり、$^{(k)}$戦という $^{(k)'}$薪を自分のものとするのでアグニであり、$^{(l)}$真実に対する歓喜という $^{(l)'}$サティーに対する憎しみをもたらすことに $^{(l)}$長けた $^{(l)'}$ダクシャであり、$^{(m)}$〔他者を〕征服する行為という $^{(m)'}$アルジュナに先んずるので $^{(m)}$恐ろしい $^{(m)'}$ビーマである最も優れた勇士たる支配者よ、梵天に属する百年の間、爾が王権を高揚させんことを。

	ハンサ鳥	支配者
(h)	マーナサ湖 (mānasa)	心 (mānasa)
	スールヤ	——
(i)	蓮華を開花させる (kamala-asaṃkoca)	繁栄を衰微させる (kamalā-saṃkoca)
	シヴァ	——
(j)	ドゥルガーを追求する (durgā-mārgaṇa)	城塞を忌避する (durga-amārgaṇa)
	アグニ	——
(k)	薪 (samidh)	戦 (samit)
	ダクシャ	——
(l)	サティーに対する憎しみをもたらすダクシャ (saty-aprīti-vidhāna-dakṣa)	真実に対する歓喜をもたらすのに長けた者 (satya-prīti-vidhāna-dakṣa)
	ビーマ	——
(m)	アルジュナ (vijaya) に先んずる者であるのでビーマ (bhīma) である	征服行為 (vijaya) に先んずる者であるので恐ろしい者 (bhīma) である

Daṇḍin が示す例は二義を含む限定句が同派生語から成り同じ形に分解されるので同一文が二義を含む〈意味の掛詞〉(arthaśleṣa) を用いた〈隠喩〉となる。一方 Mammaṭa が示す例は (i)(j)(k)(l) の四箇所で二義を含む限定句が派生を異にする語から成り異なる形に分解されるので異なる文が二義を含む〈語の掛詞〉(śabdaśleṣa) を用いた〈隠喩〉となる。Av-klp に現れる〈掛詞を用いた隠喩〉の圧倒的大部分は前者に属す。〈意味の掛詞〉と〈語の掛詞〉については GEROW [1971: 295–296, 305–306] を参照せよ。

3.2 〈音の荘厳法〉との関係

〈音の荘厳法〉(śabdālaṃkāra) から検討しよう。上掲第 36 詩節で Kṣemendra は ac 句に **k**linna-**k**ara**ṅk**apa**ṅk**a**k**alite **k**īrṇāntra° という k 音と ṅk 音による〈頭韻〉を用いている。これは火葬場に転がる髑髏の音を恐らく意識したものであろう。この〈頭韻〉を適用するに当たり彼は詩論家の定義に対しどのような姿勢をとっていたと考えられるか。

カシミールの詩論家のうち荘厳法を特に重んじた Udbhaṭa (八世紀) と Rudraṭa の定義と例を見よう。Udbhaṭa は *Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* (『詩の荘厳の真髄綱要』) 第一章第 1–10 詩節を〈頭韻〉の定義と分類に割いている[10]。彼は〈頭韻〉を〈チェーカ〉(cheka)、〈ヴリッティ〉(vṛtti)、〈ラータ〉(lāṭa) という三種に分け〈ヴリッティ〉を〈パルシャ〉(paruṣa)、〈ウパナーガリカ〉(upanāgarika)、〈グラーミア〉(grāmya) という三種に下位分類する。うち上掲第 36 詩節に適用される〈頭韻〉を説明し得るのは〈ウパナーガリカ〉、〈グラーミア〉の二種である。それぞれの定義は次の通りである[11]。

[*Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.5]
sarūpasaṃyogayutāṃ mūrdhni vargāntyayogibhiḥ |
sparśair yutāṃ ca manyante upanāgarikāṃ budhāḥ ||

母音が介在しない同形の結合子音を具え、そしてまた〔その〕頭で各系列の最終子音 (= 鼻音) と結び付いている子音を具える〔〈ヴリッティ〉を〕〈ウパナーガリカ〉だと賢者達は考える。

[*Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.6]
śeṣair varṇair yathāyogaṃ kathitāṃ komalākhyayā |
grāmyāṃ vṛttiṃ praśaṃsanti kāvyeṣv ādṛtabuddhayaḥ ||

残る音素を用いて適切な形で〔構成される〕〈ヴリッティ〉を〈グラーミア〉だと[12]、美文学に関して知性を働かせることに余念なき者達は明言する。〔この〈ヴリッティ〉は〕〈コーマラ〉という名称でも呼ばれる。

---

[10]以下引用は Narayana Daso BANHATTI ed., Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1925 に従う。Kalhaṇa の史書 *Rājataraṃgiṇī* (『王統流覧』) 第四章第 495–497 詩節は Udbhaṭa と Vāmana が Jayāpīḍa 王 (在位 857–884 年) の大臣となったことを記す。Udbhaṭa はまた教訓詩 *Kuṭṭanīmata* (『遣手女の忠告』) の作者 Dāmodaragupta の同時代人でもある。*Rājataraṃgiṇī* 4.495–497: vidvān dīnāralakṣeṇa pratyahaṃ kṛtavetanaḥ | bhaṭṭo 'bhūd udbhaṭas tasya bhūmibhartuḥ sabhāpatiḥ || sa dāmodaraguptākhyaṃ kuṭṭanīmatakāriṇam | kaviṃ kaviṃ balir iva dhuryaṃ dhīsacivaṃ vyadhāt || manorathaḥ śaṅkhadantaś caṭakaḥ saṃdhimāṃs tathā | babhūvuḥ kavayas tasya vāmanādyāś ca mantriṇaḥ || (「知者 Bhaṭṭa Udbhaṭa は毎日十万ディーナーラの給与を支給され、その王 (= Jayāpīḍa) の詩会の長となった。彼 (= Jayāpīḍa) は『遣手女の忠告』を著した Dāmodaragupta と呼ばれる詩人を主要な、聡明な大臣となした。バリがカヴィ〔を大臣とした〕ように。Manoratha、Śaṅkhadanta、Caṭaka、Saṃdhimat、そしてまた Vāmana を始めとする詩人達は彼の大臣となった。」。テキスト・詩節番号は STEIN ed., Bombay: Education Society's Press, 1892 に従う)。Kṣemendra は Udbhaṭa にも Rudraṭa にも言及しない。しかし *Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* に対する *Laghuvṛtti* の著者 Indurāja の詩を自身の詩論書に引用しているので (引用については BANHATTI, appendix VI, xxvii を参照せよ)、恐らく Udbhaṭa を知っていたはずである。Indurāja は Abhinavagupta (10–11 世紀) の師とされる人物である。Indurāja の年代については BANHATTI, introduction, xxv–xxvi を参照せよ。

[11]〈チェーカ〉と〈ラータ〉、〈パルシャ〉については GEROW [1971: 103–106] を見よ。

[12]Indurāja は grāmyāṃ に掛かる過去分詞として upanibadhyamāna「構成される」を補う。そこで yathāyogaṃ「適切な形で」を upanibadhyamāna を限定する副詞に解釈する。*Laghuvṛtti* on *Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.6 (6.12): paruṣopanāgarikopayuktavarṇāviśiṣṭair varṇair lakārādibhir upanibadhyamānā grāmyā | (「〈パルシャ〉と〈ウパナーガリカ〉に適している音素に特定されない、つまり l 音を始めとする音素で構成されるのが〈グラーミア・〔ヴリッティ〕〉である。」)

Udbhaṭa が挙げる〈ウパナーガリカ〉と〈グラーミア〉の例は次の通りである。

[*Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.*4–5]
sā**nd**rāravi**nd**avṛ**nd**otthamakara**nd**āmbubi**nd**ubhiḥ |
sya**nd**ibhiḥ su**nd**arasya**nd**aṃ na**nd**ite**nd**i**nd**irā kvacit ||

ke**l**i**l**o**l**ā**l**imā**l**ānāṃ **k**a**l**aiḥ **k**o**l**āhalaiḥ kvacit |
kurvatī **k**ānanā**r**ūḍhaśrīnūpu**r**a**r**avabhramam ||

或る所では、魅惑的に滲み出る形で滲み出る、一群の蓮華から生ずる蜜液の濃厚な滴で蜂が歓喜させられ[13]、或る所では、戯れを貪る一連なりの蜂が立てる甘いブンブン音のせいで、園林に現れ出た吉祥天の足飾りの音がしていると錯覚させてしまう〔秋の気配となった[14]〕。

Udbhaṭa は反復される子音を含む音節の韻律上の長短、反復される k 系列音の他系列音との結合の是非については規定しない。これに対し Rudraṭa は細則を設けている。彼は *Kāvyālaṃkāra* 第二章第 18–31 詩節を〈頭韻〉の議論に充て、〈頭韻〉に〈マドゥラ〉(madhura)、〈パルシャ〉、〈プラウダ〉(prauḍha)、〈ラリタ〉(lalita)、〈バドラ〉(bhadra) という五種の〈ヴリッティ〉を認める[15]。

[*Kāvyālaṃkāra* 2.18–19]
ekadvitrāntaritaṃ vyañjanam avivakṣitasvaraṃ bahuśaḥ |
āvartyate nirantaram athavā yad asāv anuprāsaḥ ||
madhurā prauḍhā paruṣā lalitā bhadreti vṛttayaḥ pañca |
varṇānāṃ nānātvād asyeti yathārthanāmaphalāḥ ||

一つもしくは二つ、三つ〔の子音〕に介在されるか、或いは介在を伴わない子音が、母音の如何を問わず複数回反復されるならば、〈頭韻〉である。子音は多様であるから、結果もたらされるものが意味通りの名称を持つから、これには〈マドゥラ〉、〈プラウダ〉、〈パルシャ〉、〈ラリタ〉、〈バドラ〉という五つの〈ヴリッティ〉だけがある[16]。

---

[13]*Laghuvṛtti* on *Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.*4 (6.4–8): *sāndrā* ghanā *aravindavṛndotthā makarandāmbubindava* iti saṃbandhaḥ | *sundarasyandaṃ syandibhir* iti sāmānyabhūtas *syandaḥ sundarasyandam* iti viśiṣṭena *syandena* viśeṣito raipoṣaṃ puṣṇāti itivat | *sundaraḥ syando* yasminn iti hi sāmānyabhūte syandane anyapadārthe sundaratāviśiṣṭaṃ syandanaṃ vṛttipadārthabhūtam | *indindirā* bhramarāḥ | (「『一群の蓮華から生ずる蜜液の濃厚な (sāndrā = ghanā) 滴』というように構文上結び付く。『魅惑的に滲み出る形で滲み出る』というのは一般的な滲出作用が『魅惑的に滲み出る形で』という〔語に〕限定された滲出作用で差異化されている。『財産を豊かにする形で豊かにする』というように。実に『そ〔の滲出作用に〕美しい滲出作用がある所の〔滲出作用〕』と〔複合語が分解される〕が故に、一般的な滲出作用が異なる語義を持つことになるので、統合形が意味する所は『美しさに限定される滲出作用』である。indindira とは蜂のことである。」)

[14]第四詩節を例示する詩節から補う。*Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* 1.*3: tatra toyāśayāśeṣavyākośitakuśeśayā | cakāśe śālikiṃśārukapiśāśāmukhā śarat || (「その場所では湖中に睡蓮を隈なく満開させ、稲の芒で四方が黄色く染まる秋の気配となった。」)。

[15]テキストは DURGĀPRASĀD and PANŚĪKAR ed., Bombay: NSP, 1887 に基づく。〈プラウダ〉、〈パルシャ〉については GEROW [1971: 104] を見よ。

[16]varṇa は本来「音素」であるが、Namisādhu はこれを vyañjana「子音」の意味に解すべきであると述べる。また同註に従い iti を完了の意味に解す。Namisādhu on *Kāvyālaṃkāra* 2.18 (17.17–19): vyañjanānām āvṛttyānuprāsasyoktatvād *varṇānām* ity ukte 'pi vyañjanānām iti gamyate | kās tāḥ *madhurā*, *prauḍhā*, *paruṣā*, *lalitā*, *bhadrā* | *itiś*abdaḥ parisamāptyarthaḥ | etā eva, na tv aṣṭau tisro vā | (「子音の反復によって〈頭韻〉が表示されるので、「音素の」と言われているけれども、「子音の」と理解される。それら〔ヴリッティ〕とは何か。〈マドゥラ〉、〈プラウダ〉、〈パルシャ〉、〈ラリタ〉、〈バドラ〉である。iti という語は完了を意味する。これらのみであって、八つもしくは三つではない。」)

以上の五分類に Av-klp 第 72 章第 36 詩節の〈頭韻〉を説明し得るものを求めるならば〈マドゥラ〉と〈バドラ〉がこれに近い。彼が与える〈マドゥラ〉の定義と例は次の通りである。

[*Kāvyālaṃkāra* 2.20–21]
nijavargāntyair vargyāḥ saṃyuktā upari santi madhurāyām |
tadyuktaś ca lakāro raṇau ca hrasvasvarāntaritau ||
tatra yathāśakti raṇau dvis trir vā yuktito lakāraṃ ca |
pañcabhyo na kadācid vargyān ūrdhvaṃ prayuñjīta ||

〈マドゥラ・〔ヴリッティ〕〉では各系列の子音がその頭で各自の系列の最終子音 (= 鼻音) と結合しているか、l 音がそれ (=l 音) と結合しているか、r 音と ṇ 音とが韻律上短い母音に介在されているかである。それら〔子音〕のうち r 音と ṇ 音は最大限用いて良い。理論上〔l 音と結合した〕l 音を二回もしくは三回〔用いてよい。しかし〕如何なる時でも〔その頭で各自の系列の最終子音と結合した〕各系列の子音を五回を超過して用いてはならない。

[*Kāvyālaṃkāra* 2.22–23]
bhaṇa taruṇi ramaṇama**nd**iram āna**nd**asya**nd**isu**nd**are**nd**umukhi |
yadi sa**ll**īlo**ll**āpini gacchasi tat kiṃ tvadīyaṃ me ||
anaṇuraṇanmaṇimekhalam aviratasi**ñj**ānama**ñj**uma**ñj**īram |
parisa**raṇ**am a**ruṇ**aca**raṇ**e **raṇ**a**raṇ**akam akā**raṇ**aṃ kurute ||

語っておくれ、歓喜を滴らせる美しい月のような顔をし、素晴らしく色っぽい仕草をとって甘い言葉を発すのを常とし、〔ラック染料の〕赤い足跡を付ける娘よ、〔君が〕もし夫の家へと行っているのなら、どうして君の走りは理由もなく私に恋慕の情をもたらすのか。宝珠で飾られた腰帯が高く音を立て、足飾りが絶えずジャラジャラと音を立てて魅力的な〔その走りが〕[17]。

Rudraṭa が定義する〈マドゥラ〉は、結合した同一子音の反復を l 音にのみ限定する点、韻律上短い母音に介在される r 音と ṇ 音の反復をこれに含める点を除き Udbhaṭa の〈ウパナーガリカ〉と同じである。次に〈バドラ〉の定義と例を見よう。

[*Kāvyālaṃkāra* 2.29]
lalitāyāṃ ghadhabharasā laghavo laś cāparair asaṃyuktaḥ |
pariśiṣṭā bhadrāyāṃ pṛthag athavā śravyasaṃyuktāḥ ||

[17]Namisādhu on *Kāvyālaṃkāra* 2.22–23 (18.14–20): *bhaṇa* vada tvam eva he *taruṇi*, *yadi* tvaṃ nijadayita-*mandiraṃ* vrajasi *tat kiṃ* | *tvadīyaṃ parisaraṇaṃ me* niṣprayojanam eva *raṇaraṇakaṃ* hṛdayākulatvaṃ *kurute* | *ānandasyandi* harṣakāri *sundaraṃ* ramyam *induvan mukhaṃ* yasyāḥ sāmantryate | tathā *sallīlayā* suvilāsen*ollapituṃ* vaktuṃ śīlaṃ yasyāḥ sā cāmantryate | tath*āruṇacaraṇe* lohitakrame | kīdṛśaṃ parisaraṇam | *anaṇu* tāraṃ *raṇantī* śabdāyamānā *maṇimekhalā* ratnaraśanā yatra tat | tath*āviratam śiñjanāni* (Read *śiñjānāni*) raṇanti *mañjūni* madhurāṇi *mañjīrāṇi* caraṇābharaṇāni yatra tat | (「実に君は語っておくれ (bhaṇa = vada)、ねぇ娘よ、もし君が自分の夫の家へと行っているなら、どうして君の走りは全く理由もなく恋慕の情つまり心の動揺を私にもたらすのか。歓喜を滴らせるつまり歓びをもたらす美しい (sundaraṃ = ramyam)、月のような顔をした女に呼び掛けている。そしてまた素晴らしく色っぽい仕草をとって (sallīlayā = suvilāsena) 甘い言葉を発すのを (ullapituṃ = vaktuṃ) 常とする女に呼び掛けている。そしてまた赤い足跡を付ける女よ (aruṇacaraṇe = lohitakrame)、どのような走りか。高く (anaṇu = tāraṃ) 音を立てる (raṇantī = śabdāyamānā)、宝珠に飾られた帯 (maṇimekhalā = ratnaraśanā) がある〔走り〕。そしてまた絶えずジャラジャラ音を立てて魅力的な (mañjūni = madhurāṇi) 足飾り (mañjīrāṇi = caraṇābharaṇāni) がある〔走り〕。」)

〈ラリタ・〔ヴリッティ〕〉では gh, dh, bh, r, l, s 音が別の子音と結合されず、韻律上の短音となる。〈バドラ・〔ヴリッティ〕〉では〔四つの〈ヴリッティ〉に適用される子音から〕残された〔子音〕が単独で (= 別の音と結合されずに) 存在する。或いはまた〔結合される場合は〕、耳にされて然るべき〔子音〕と結合されたもの〔とならねばならない〕。

[*Kāvyālaṃkāra* 2.31]
utkaṭakarikaraṭataṭasphuṭapāṭanasupaṭukoṭibhiḥ kuṭilaiḥ |
khele 'pi na **kh**alu na**kh**arair ulli**kh**ati hariḥ **kh**arair ā**kh**um ||

それについている鉤が象の丸みを帯びた丈夫なこめかみをはっきりと切り裂くことが出来る、曲がっていて鋭い爪を用いて、獅子は遊戯の時にも決して鼠を引き裂くことがない[18]。

すなわち他の子音と原則結合しない k 系列音、ṭ系列音が韻律上の長短を問わず反復されるのが〈バドラ〉となる。Udbhaṭa も Rudraṭa も定義を例証するのに kolāhala「ブンブン音」、śiñjāna「ジャラジャラ音」という声喩を用いるなどして苦労しているように[19]、以上の〈頭韻〉を実際の詩作に応用することが詩人にとって至難の業であったことは想像に難くない。しかし以上が形骸化した理論として継承されていた訳ではないことは実作品の用例から裏付けられる。Rudraṭa と同時期に活動したカシミールの宮廷詩人 Ratnākara は美文叙事詩 *Haravijaya*（『シヴァの勝利』）第 13 章第 76 詩節、第 43 章第 191 詩節で Rudraṭa が規定する以上二種の〈頭韻〉をほぼ完璧に体現している[20]。

[*Haravijaya* 13.76]
ka**ṅk**ālasa**ṃk**ulam aśa**ṅk**ita**k**ā**k**a**k**a**ṅk**asa**ṃk**etadhāma raṇavartma śaśā**ṅk**amaule |
ṭā**ṃk**ārikārmukaviṭa**ṅk**apaṭa**ṅk**am astu **ṭ**a**ṅk**ā**ṅk**asa**ṃk**a**ṭ**aviśa**ṅk**a**ṭ**aka**ṅk**a**ṭ**aṃ vaḥ ||

月を冠に戴く御方よ、干戈を交えつつ貴方様がお進みになる道が、弓の筈に張られた竹皮の弦がビュンビュン音を立て、〔そこに転がる〕鎧が鏃で隙間なきまでに針鼠となっていて恐ろしく、骸骨で満ち溢れる、警戒を解いた烏や鷺達の逢瀬の場所とならんことを[21]。

---

[18]Namisādhu on *Kāvyālaṃkāra* 2.31 (20.14–17): *hariḥ* siṃho *na khalu* naiva *khele 'pi* krīḍāyām apy *ākhuṃ* mūṣakam *ullikhati* vidārayati *nakhaiḥ* | kīdṛśaiḥ | *utkaṭā* dṛḍhā ye *karikaraṭataṭā* dvipagaṇḍasthalāni teṣām yat *phuṭaṃ* (Read *sphuṭaṃ*) prakaṭaṃ *pāṭanaṃ* dāraṇaṃ tatra *suṣṭhu paṭur* dakṣā *koṭir* agraṃ yeṣāṃ taiḥ | tathā *kuṭilair* anṛjubhiḥ *kharais* tīkṣṇaiḥ |（「獅子は (hariḥ = siṃho) 遊戯の時にも (khele 'pi = krīḍāyām api)、鼠を (ākhum mūṣakam) 爪を用いて決して引き裂くことがない (na khalv ullikhati = naiva vidārayati)。どのような〔爪〕を用いてか。丈夫な (utkaṭā = dṛḍhā)、象の丸みを帯びたこめかみを (karikaraṭataṭā = dvipagaṇḍasthalāni) はっきりと (sphuṭaṃ = prakaṭaṃ) 切り裂くことが (pāṭanaṃ = dāraṇaṃ) 出来る (suṣṭhu paṭur = dakṣā) 鉤 (koṭir = agraṃ) を具え、そしてまた曲がっていて (kuṭilair = anṛjubhiḥ) 鋭い (kharais = tīkṣṇaiḥ)〔爪〕を用いて。」）

[19]声喩が 8–9 世紀の美文作品に共通する一大特徴であることは Bhavabhūti (八世紀) の戯曲作品がそれを物語る通りである。彼の戯曲における用例については STCHOUPAK [1968: xxxviii-xxxix] を参照せよ。

[20]テキストは DURGĀPRASĀD and PARAB ed., Bombay: NSP, 1890 に従う。*Haravijaya* における〈頭韻〉の例を示した論文として SHARMA [1966] がある。しかし網羅的なものではなく、彼が言う〈頭韻〉がどの詩論家の体系に基づくものなのかは明らかにされていない。

[21]*Viṣamapadoddyota* on *Haravijaya* 13.76: *kaṅkālaṃ* śavaśarīram | *kaṅkāḥ* pakṣiviśeṣāḥ | *ṭāṃkāriṇaḥ* saśabdāḥ *kārmukāṇāṃ viṭaṅkeṣu* koṭiṣu *paṭaṅkā* veṇutvaṅmayā guṇā yatra | *ṭaṅkāḥ* śarāḥ | *kaṅkaṭāḥ* saṃnāhāḥ ||（「骸骨 (kaṅkāla) とは屍の骨格 (śavaśarīra) のことである。鷺 (kaṅka) とは鳥の一種である。〔ṭāṃkārikārmukaviṭaṅka-paṭaṅkam は処格所有複合語で〕弓の筈 (viṭaṅkeṣu = koṭiṣu) に張られた paṭaṅka つまり竹の皮で出来た糸がビュンビュン音を立てる、すなわち音を立てている〔道と分解される〕。ṭaṅka とは矢のことである。kaṅkaṭa

[*Haravijaya* 43.191]
cakṣur vikṣipya rūkṣāgrapakṣmaparyantapāṭalam |
tasthāv akha**ṇḍ**akoda**ṇḍ**aca**ṇḍ**ador**ḍ**ama**ṇḍ**alaḥ ||

〔携える〕完全無欠の弓のせいで一群の棒のようなその腕が凄まじい〔シヴァ〕は、先端がぼさぼさとした睫毛のせいで縁に青色を湛えている目をあちこちに走らせ続けた。

これに対し Kṣemendra が第 36 詩節に適用する〈頭韻〉は sakala**kl**eṣa°、**kl**innakaraṇka° というように反復される k 系列音が他系列の子音と結合した形をとる。確かに Udbhaṭa は k 系列音の反復について「適切な形で〔構成される〕」(yathāyogam) と述べるのみで他系列の子音との結合の是非を規定していない。また Rudraṭa も「耳にされて然るべき〔子音〕と結合された」(śravyasaṃyukta) という許容条件を課している。しかし両者が示す例は一箇所の例外 (**kv**acit) を除き k 系列音が他系列の子音と結合する形を取っていないので原則 k 系列音を他系列の子音と結合させることを忌避していたと言えよう。この点 Kṣemendra の用例は詩論家の理論に余り忠実ではない。これを Kṣemendra が荘厳法の適用に失敗した結果と解釈すべきか。それとも彼が荘厳法の厳密な適用を元々意図していなかったことによるものと見なすべきか。確かに前者を否定することは出来ないが、我々は後者を支持する有力な状況証拠を彼の詩論書 *Aucityavicāracarcā* (『適切性に関する論考』、Aucitya) に見出すことが出来る。

4 詩論から見た Kṣemendra の著作姿勢

4.1 〈適切性〉との関係

詩人が〈頭韻〉の遊戯に耽ることに関し Kṣemendra が批判的な見方をしていたことは Aucitya 第 11 詩節の説明から明白である。〈語の適合性〉(padaucitya) を説く当該詩節の説明で Kṣemendra は Dharmakīrti の詩を挙げ彼が〈頭韻〉を〈適切性〉に優先させているのを次のように批判する[22]。

とは鎧のことである。」)。SCHMIDT Nachtr. が報告するように paṭaṅka を「弦」という意味で用いる用例は kośa 類には見られない。Alaka 註は c 句の ṭaṅkāṅkasaṃkaṭaviśaṅkaṭakaṅkaṭaṃ に対する分析文を示していないが、ṭaṅkāṅkasaṃkaṭaviśaṅkaṭa° を ṭaṅkāṅkasaṃkaṭāś cāmī viśaṅkaṭāś ca という同格限定複合語に解し、全体を ṭaṅkāṅkasaṃkaṭaviśaṅkaṭāḥ kaṅkaṭā yasmin という処格所有複合語とする解釈をとった。

[22] テキスト・頁行数は Kāvyamālā 叢書 (Bombay: NSP, 1886) のそれに従う。当該詩節は Vidyākara (11 世紀後半) が編集した詞華集 *Subhāṣitaratnakoṣa* (『名句の宝蔵』) 第 16 章 (第 454 詩節)、Ānandavardhana の詩論書 *Dhvanyāloka* (『暗示の光』) 第三章第 41 詩節に対する自註 (216.6–9) に引用されている。Ānandavardhana は当該詩節の内容と認識論書 *Pramāṇavārttika* の末尾に付された詩節の内容との間に類似性が認められることを根拠に当該詩節を哲学者 Dharmakīrti に帰す。

Dharmakīrti が認識論の領域のみならず文学作品の領域で活動した人物であることは周知されているが、STRAUBE [2009] は哲学者 Dharmakīrti と詩人 Dharmakīrti が同一人物であることを再検証した。彼は上記の *Dhvanyāloka* における説明に加え以下を同一人物説の状況証拠に挙げる。(1) *Subhāṣitaratnakoṣa* には Dharmakīrti に帰せられる 19 の詩節が収められている。Vidyākara は収録した全詩節の三分の一について詩節の著者を示しており、それらは非常に正確である。(2) *Subhāṣitaratnakoṣa* には詞華集の編者が一般に用いる dharmakīrteḥ という呼称の他に、有名な哲学者達に用いられるものと思われる bhadantadharmakīrteḥ、dharmakīrtipādānām という呼称が現れる。(3) Vibhūticandra (1200 年頃) は Manorathanandin の *Pramāṇavārttikavṛtti* の写本を筆写し補遺を付しているが、その補遺部分に Vidyākara が Dharmakīrti に帰す一詩節が存在する。(4) Vallabhadeva が編集した詞華集 *Subhāṣitāvali* (『名句の連なり』) に *Vādanyāya* の一詩節が Dharmakīrti の名で引用されている。(5) 詩論家や詞華集の編者による同定を信頼する証拠はないにせよ、真摯且つ学究的な著作を残した著作家が自嘲的且つ色情的な詩句を残したことを否定するものはない。Ānandavardhana が *Dhvanyāloka* で〈同音反復〉(yamaka) や詩節の音節を特定の形に配列すると意味が現れる技法を駆使した詩作を否定しているにもかかわらず、自身の *Devīśataka* (『女神百頌』) でこの技法を駆

[Aucitya 117.10–13]
lāvaṇyadraviṇavyayo na gaṇitaḥ kleśo mahān svīkṛtaḥ
svacchandasya sukhaṃ janasya vasataś cintājvaro nirmitaḥ |
eṣāpi svayam eva tulyaramaṇābhāvād varākī hatā
ko 'rthaś cetasi vedhasā vinihitas **t**anvyās **t**anuṃ **t**anvatā ||

創造主は美という富を費やすことを気に掛けず、大きな苦しみを請け負って、気侭に振る舞い安穏に暮らす人が抱く愁いという熱病をつくり出した。この哀れな女も〔自分と〕釣り合う男がいないせいで実に自ら望みを失ってしまった。〔当の創造主は〕心中に如何なる意図を抱いていたのだろうか。細身の女の体を創りながら。

[Aucitya 117.14–17]
atra 'tanvyāḥ' iti padaṃ kevalaśabdānuprāsavyasanitayā nibaddhaṃ na kāṃcid arthaucitya-camatkārakaṇikām āviṣkaroti | 'sundaryāḥ' ity atra padam anurūpaṃ syāt | anyāni vā niratiśayarūpalāvaṇyavyañjakāni | tanvīpadaṃ tu virahavidhuraramaṇījane prayuktam arthaucitya-śobhāṃ janayati |

ここで「細身の女の (tanvyāḥ)」という語は言葉の〈頭韻〉に単に耽るものとして使用されているので意味との〈適合性〉から生まれる一欠片の感動も何ら発露させない。ここでは「麗しき女の (sundaryāḥ)」という語が相応しいとされるべきである。或いは比類なき容姿の美を暗示する別〔の語が相応しいとされるべきである〕。一方「細身の女 (tanvī)」という語は別離で心塞がれた若い女に対して使用されると、意味との〈適合性〉から生まれる輝きを生ぜしめるであろう。

愛しい男との別離を経験して痩せ細った女性を描くべき時に用いる「細身の女」(tanvī) という語を Dharmakīrti が t 音の〈頭韻〉を表現するためだけに不適切な文脈で適用していることを Kṣemendra は批判する。つまり詩作において〈語の適合性〉は〈頭韻〉に勝ると言うのである。

4.2 〈情〉との関係

以上と同様の例は Aucitya 第 16 詩節の説明にも見出される。Kṣemendra は〈嫌悪の情〉(bībhatsa-rasa) に関する〈適切性〉を例証すべく自身の作品 *Munimatamīmāṃsā* (『聖仙の見解の考究』) から次のような詩節を引用する。

[Aucitya 129.16–19]
sarvāpāyacayāśrayasya niyataṃ kutsānikāyasya kiṃ
kāyasyāsya vibhūṣaṇaiḥ suvasanair ānandanaiś candanaiḥ |
antar yasya śa**k**ṛdya**k**ṛ**t**kṛmi**k**ula**k**lomāntramālākule
klediny antadine prayānti vimukhāḥ kauleyakākā api ||

上等な衣装や歓喜をもたらす白檀香という諸々の装飾具がこの身体にいかなる意味を持とう。この身体はあらゆる一群の不幸の拠り所であり、蔑みが絶えず集まる場所だから[23]。最後を迎える日には、腐敗するものであり排泄物や肝臓や回虫の群れや肺

使していることを考えれば、著作家が論書で否定するものを別な作品で適用していても不思議ではない。Dharmakīrti の論書とそれに対する注釈については塚本・松長ほか [1990: 418–445] を参照せよ。

[23] 当該箇所の直訳は「蔑みの集まりがある所の〔身体〕」(kutsāyā nikāyo yasmin) となろう。また niyatam「絶えず」は当該箇所に掛かる副詞と見るべきであろう。

や一続きの腸で満たされたものである、そ〔の身体〕の中身に犬や烏達でさえ見向きもせず去って行くのだから。

c 句に k 音による〈頭韻〉が認められよう。しかしここでも °kula**kl**oma° という箇所で k 音の頭韻が結合子音をとり Rudraṭa の定義に合致しない。またこの詩節に対する Kṣemendra の自註は彼の詩論的姿勢に重要な示唆を与える。

[Aucitya 129.20–22]
atra vairāgyavāsanācchuritabībhatsarasasya jugupsākhyasthāyibhāvocitakāyagatakutsitatarāntratantrādisamudīraṇena parā paripuṣṭir niḥsāraśarīrābhimānavairasyajananī pratipāditā ||

ここでは〈嫌悪感〉(jugupsā) と呼ばれる〈基本的感情〉(sthāyibhāva) に適合した、身体に存する相当に蔑まれるべき一続きの腸を始めとするものへの言及が、離欲という心に潜む無意識の思いと混じり合った〈嫌悪〉(bībhatsa) という〈情〉(rasa) を究極的に育む働きをもたらしており、〔その働きは〕内実のない身体への驕りに対する嫌気を生ぜしめるものである[24]。

c 句末の「腐敗するものであり排泄物や肝臓や回虫の群れや肺や一続きの腸で満たされた」(śakṛdyakṛtkṛmikulaklomāntramālākule) という表現が〈嫌悪感〉という〈基本的感情〉と適合しているので〈嫌悪の情〉を育んでいると Kṣemendra は説明する。この箇所が k 音の〈頭韻〉と「一連なりの腸」(antramālā) という表現を用いている点で Av-klp 第 72 章第 36 詩節 c 句と共通点があることは注目されて良い。この事実を以上の Aucitya における説明と照らし合わせるならば Kṣemendra は Av-klp 第 72 章第 36 詩節でも〈嫌悪の情〉を意識し、これを〈頭韻〉の適用や内臓への言及という間接的な形で表現することを意図していたのではないか[25]。無論詩論家の定義と Av-klp における Kṣemendra の荘厳法との齟齬の事例を全て〈情〉や〈適切性〉で説明できる訳ではない。しかし彼は詩論家が規定する〈掛詞〉や〈頭韻〉を厳密に体現することよりも寧ろ、〈適切性〉を遵守しつつ〈情〉を表現することを Av-klp の著述において重視していたと考えることが出来よう。

---

[24] インド古典詩論体系における〈基本的感情〉と〈情〉については上村 [1999: 45] を参照せよ。

[25] 彼が Ānandavardhana が提唱した〈情〉の〈暗示〉(dhvani) を念頭に置いていたかは不明である。Kṣemendra は Abhinavagupta の下で詩学を学んだと述べており、Abhinavagupta は *Dhvanyāloka* に対する註釈書 *Locana* を著しているので当然 Kṣemendra は〈暗示〉を知っていたはずである。しかし不思議なことに彼は自身の詩論書で〈暗示〉に全く言及しない。これに関し RAGHAVAN [1942: 270] は Aucitya の至る所で〈暗示〉は示唆されていると述べ Kṣemendra が〈語の適切性〉を説明する箇所から次の例を挙げる。すなわち Kṣemendra は当該箇所で Harṣa (七世紀) の戯曲 *Ratnāvalī* 第二幕第 13 詩節を挙げ、愛しい男との別離状態にあることを示唆する「四肢がやつれた女の」(kṛśāṅgyāḥ) という語が「最高の適切性を育んでいる」(paramam aucityaṃ puṣṇāti) と述べる。

[*Ratnāvalī* 2.13]
parimlānaṃ pīnastanajaghanasaṅgād ubhayatas tanor madhyasyāntaḥ parimilanam aprāpya haritam |
idaṃ vyastanyāsaṃ ślathabhujalatākṣepavalanaiḥ kṛśāṅgyāḥ saṃtāpaṃ vadati bisinīpattraśayanam ||

豊満な乳房と臀部から離れることがないので両端では萎れ、か細い腰とは密に触れないので真ん中は黄色をし、元気のない蔓草のような腕を投げ出して悶えるせいで乱れてしまったこの蓮瓣の褥は、四肢がやつれた女 (= サーガリカー) の苦痛を物語る。

RAGHAVAN [1942] はこの詩節に対する Kṣemendra の説明が「〈適切性〉を保つ語が別離とその結果として生まれる苦しみの状態すなわち〈添えない恋〉(vipralambha) を示唆しているので我々を満足させている」という主旨のことを述べていると解釈し、Kṣemendra は体系的な形で〈暗示〉の原理に自身の〈適切性〉についての説明の基盤を十分に且つ明らかに置いていたに違いないという見解を示す。

5 結論

以上の考察から「ヴァーサヴァダッターの教化」おける Kṣemendra の著作姿勢を次のように結論付けることが出来よう。

(1) 第 33、36 詩節に Kṣemendra が適用する〈掛詞を用いた比喩〉、〈頭韻〉は Daṇḍin 以降の詩論家の理論を忠実に踏まえたものとは言えない。これは彼が詩論家の理論を適用するのに失敗したことによるのではなく、彼等の理論を厳格に体現することを前提としていなかったことによる。

(2) Kṣemendra は少なくとも Av-klp を著した段階では荘厳法の体現よりも〈適切性〉や〈情〉を重視する著作姿勢をとっていた。

Rudraṭa らが定める〈荘厳法〉を体現しようとする限り、詩作上の〈不適切性〉や〈欠点〉(doṣa) を内在させることは詩人に不可避であったに違いない。例えば〈頭韻〉であれば予め定めた音の枠組みに合わせて言葉を選ばねばならないので、非周知な語や声喩の適用にどうしても頼らざるを得ない箇所が出て来てしまう。Ratnākara の詩節の例のみならず詩論家自身が挙げる例示詩節がこのことを如実に示している。Av-klp の詩節が荘厳法に余り厳格でない一方、同時代の著作家の作品に比べ声喩法や非周知の語の適用例が少ない理由は〈情〉や〈適切性〉に重きを置いていたことによるとも考えられよう。また以上が示唆する所は Av-klp のテキスト校訂においても重要な意味を持とう。すなわちテキストを復元する過程で状況証拠として荘厳法の理論を適用する場合、厳密な荘厳法を適用することに我々は慎重にならなければならないのである。テキストの復元作業には寧ろ〈適切性〉や〈情〉の理論を導入して然るべきであろう。

付論　Av-klp 第 72 章第 1–39 詩節和訳研究

以下に Av-klp 第 72 章 Upagupta 第 1–39 詩節の和訳を行う。底本としたテキスト、校合した写本と蔵訳、参照した本文批判及び写本の転写方法は本誌前号に掲載した拙訳で用いたものに同じである。テキストと写本、蔵訳の対応箇所は次の通り。[Ed.] DĀS and VIDYĀBHŪṢAṆA eds., Calcutta: The Baptist Mission Press, 1918, vol. 2, 564–574. Cf. DE JONG [1979: 156–157]. [Mss.] A = BENDALL Cat Add. 1306, 290a5–292b2; E = NGMPP reel #B95/5, 70a2–71b3; Z = Tōhoku Cat, #7034, 470a5–473b1; D Khe156ba–160a3. [Tib.] Z 470a6–473a2; D Khe156b2–160a4; P Ge279b7–281b3; G Ge352a4–354b3; N Ge249b7–251b2.

先行訳としては VAIDYA の教本 (Darbhanga: The Mithila Institute, 1959) に基づいた抜粋訳が STRONG [1992: 76–80] に、全訳が引田 [2004: 227–256] に発表されている。しかしいずれも自由訳に近い内容であり、その性格に照らし本訳では両者の問題点を逐一指摘していない[1]。訳注は

[1]STRONG [1992] による本章からの抜粋訳が相当に杜撰なものであることは DE JONG [1995] が指摘する所である。同書に対する書評についてはこれまでに発表した拙論でも幾度か触れたが、脱漏があったので茲に補足する。すなわち BAREAU [1993]、DURT [1993] のものである。前者は同書の内容を紹介し次の点を高く評価する。(1) 著者は優れた人類学者たることに甘んじず、仏教史家・文献学者たらんとしており、仏語への完璧な習熟はフランス、ベルギーのインド学者の業績を非常に手広く利用することを可能たらしめている。(2) 著者は網羅的な手法で自身の論題を扱っており、その手法は仏教の多様な側面と仏教それ自体が孕む多くの問題を著者に考察せしめている。そして著者はそれらの側面や問題について様々な解釈と解決策を与え慎重に批評し適切な見解を付け加えている。これらの点を評価し BAREAU [1993] は同書が「内容が幅広く豊富であるので Upagupta の伝説と信仰に関する知識を得ようとする者だけでなく、仏教に興味を持つ者皆に参照され読まれるものとなろう」と総括する。後者は書評と言うよりは寧ろウパグプタ伝説に関する研究史とその歴史、思想的な問題を概観したものである。DURT [1993] は著者が Eugène BURNOUF

テキスト解釈に関するものに限定した。同話は 39 詩節から成り、うち 35 詩節の韻律は anuṣṭubh である。残る四詩節の韻律の内訳は vasantatilakā (第一詩節)、mālinī (第 33 詩節)、śārdūlavikrīḍita (第 31, 36 詩節) である。anuṣṭubh の正規形と非正規形の内訳は以下の通りである。

pathyā	2, 3a, 4, 5a, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15c, 16c, 17a, 18c, 19c, 20, 21a, 22a, 23, 24, 25c, 26, 27c, 28, 29, 30c, 32, 34, 35, 37c, 38a, 39	56	80%
na-vipulā	3c, 5c, 18a, 21c, 27a, 37a, 38c	7	10%
bha-vipulā	15a, 17c, 19a	3	4.29%
ma-vipulā	16a, 22c, 25a, 30a	4	5.71%
総計		70	100%

[1] 題辞

yair eva yāti viṣayair abhilāṣabhūmiṃ
sarvo janaḥ smararajaḥparibhūtadṛṣṭiḥ |
tair eva puṇyaparimārjanaśuddhibhājāṃ
vairāgyayogam upayāti manaḥ praśāntim || 72.1 ||

[290a5] yair eva yāti viṣayair abhilāṣabhūmiṃ
sarvvo janaḥ smararajaḥparibhūtadṛṣṭiḥ |
ter eva puṇyaparimārjjanaśuddhibhājāṃ
verāgyayogam upayāti manaḥ praśāntiṃ ||

[470a5] | yai re ba yā ti bi sha yai ra bhi lā ṣha bhū maḥ
sa rbbo dza naḥ sma ra ra dzaḥ pa ra bhū [470b1] ta dri ṣhṭiḥ |
| tai re ba pu ṇya pa ri mā rdza na shu ddhi bhā dzāṃ
bai rā gya yo ga mu pa yā ti ma naḥ pra shā nti m |

1d manaḥ praśāntim] AEDZ; *manaḥpraśāntim Ex conj. Ed; *manaḥ praśāntam Ex conj. DE JONG.

| skye bo 'dod pa'i rdul gyis mig ni yongs su nyams pa kun |
| yul ni gang dag nyid kyis mngon par 'dod pa'i sar 'gyur ba |
| de nyid kyis ni bsod nams yongs gtsang dag pa brten rnams kyi |
| yid ni rab tu zhi zhing chags bral ldan pa dag tu 'gyur | 72.1 |

1a yongs su] DZ; om. PGN (unmetrical). **1b** kyis] DZ; kyi PGN. || 'gyur] PGN; gyur DZ. **1c** brten] PGN; bsten DZ. **1d** 'gyur] PGN; gyur DZ.

人は皆、性愛という埃のせいで物を見る力を完全に奪われると、貪欲の対象へと赴くが[2]、〔それは〕まさに諸感官が働く対象を通じてである。徳ある行為という、〔性愛

以来の学術業績を踏まえている点、著者が多領域に足を踏み入れてウパグプタに関する伝説が東南アジア的な発展を遂げていることを明らかにし、ウパグプタの疑似史的な人物像に光を投げ掛けている点などを評価する。

[2]abhilāṣabhūmiṃの解釈が難しい。精神状態を表示する語と共に bhūmi が用いられる用例を探すとŚrīharṣa (12 世紀) の *Naiṣadhīyacarita* (『ニシャダ王の事績』) 第 15 章第 54 詩節の用例が参考になる (テキストと詩節番号はŚIVADATTA ed., Bombay: NSP, 1894 に基づく)。

[*Naiṣadhīyacarita* 15.54]
viśeṣatīrthair iva jahnunandinī guṇair ivājānikarāgabhūmitā |

という埃を〕拭い取る手段を用いて清浄を得る御方の心は離欲と結び付いて静まるけれども[3]、〔これも〕全く同じもの (= 諸感官が働く対象) を通じてである。

[2] ウパグプタの誕生と家業への従事

abhūd guptābhidhānasya gāndhikasya sutaḥ purā |
mathurāvāsinaḥ śrīmān upagupta iti śrutaḥ || 72.2 ||

abhūd guptābhi[290b1]dhānasya gāndhikasya sutaḥ purā |
mathurāvāsinaḥ śrīmān upagupta iti śrutaḥ ||

| a bhū dgu ptā bhi dha na sya ga ndhi ka sya sutaḥ purāḥ |
| ma thu rā vā si na shrī mā nu pa gu pta i ti shru taḥ |

| bcom brlag dag na gnas pa sngon | | sbas pa zhes bya spos 'tshong gi |
| bu ni dpal dang ldan pa dag | nyer sbas zhes par grags pa byung | 72.2 |

昔、マトゥラーに住むグプタという名の香料商に吉祥なる、ウパグプタと呼ばれる息子が生まれた。

ajātaḥ kalpitaḥ pitrā sa bhikṣoḥ śāṇavāsinaḥ |
anuyāyīti vacanāt tadbhaktinirato 'bhavat || 72.3 ||

ajātaḥ kalpitaḥ pitrā sa bhikṣoḥ śāṇavāsinaḥ |
anuyāyīti vaca(nāt tad)bhaktinirato bhavat* ||

| a dzā taḥ ka lpi taḥ pi trā sa bhi kṣhoḥ shā ṇa bā si naḥ |
| a nu yā yī ti ba tsa sā ta dbha kti ni ra to bha bat |

3c vacanāt] AE (Ed.); vacasā DZ.

| shā na'i gos can dge slong gi | | rjes 'brang ngo zhes pha yi ni |
| tshig gis ma skyes pa nas brtags | | de ni de la gus ldan gyur | 72.3 |

---

jagāma bhāgyair iva nītir ujjvalair vibhūṣaṇais tatsuṣamā mahārghatām ||

ジャフヌの娘 (= ガンガー) が際立った諸々の聖地の御蔭で、生得的な愛情の対象が持っている性質が諸々の美質の御蔭で、統治が輝かしい〔前世の業がもたらす〕天運の御蔭でとても貴いものとなるように、彼女 (= ダマヤンティー) の絶世の美は諸々の飾りの御蔭でとても貴いものとなった。

下線部に対する Nārāyaṇa 註は次の通り。Nārāyaṇa on *Naiṣadhīyacarita* 15.54 (321.17–19): *ājānikaḥ* sahajo *rāgaḥ*, tasya *bhūmiḥ* sthānaṃ putrādiḥ, tasya bhāvas tattā sahajā snehapātratā *guṇaiḥ* śīlalāvaṇyādibhir iva (「〔生得的な愛情の対象が持っている性質とは〕生得的な (ājānikaḥ = sahajo) 情愛の対象 (bhūmiḥ = sthānaṃ)、つまり息子を始めとする者、それが持っている性質 (tasya bhāvas = tattā) である。生得的な愛情の受け皿が持っている性質が美質つまり善い品行や眩い美貌などの御蔭で〔貴いものとなる〕ように。」)。以上の語釈を考慮するとここで言われているのは「貪りの精神段階に到達する」ということではなく「貪りの的へと向かって行く」ということではないか。

[3]d 句に対応する Tib. は yid ni rab tu zhi zhing chags bral ldan pa dag tu 'gyur「心はとても静まり、離欲を持つ者となる」である。DE JONG は Tib. に従い d 句末の praśāntim (対格・単数・女性) を praśāntam (対格・単数・男性) にかえ、これを vairāgyayogam の限定句として d 句を「心は寂静を得、離欲と結び付くことになる」と読む解釈を疑問符付きで提案する。しかしこの修正案は梵文写本 A、ダライラマ五世版梵文音写からも支持されない。寧ろ vairāgyayogam を vairāgyena yogo yasya tat という所有複合語として manas の限定句に解せば写本通り解釈出来よう。

3b yi] DZG; yis PN. **3c** gis] DZ; gi PGN. ‖ brtags] PGN; btags DZ.

生まれる前から、父親は彼を〔出家させようと〕考えていた。〔その彼は〕「シャーナヴァーシン比丘に御仕えする者となりなさい。」という言葉に従って、彼 (= シャーナヴァーシン) に深く帰依する者となった。

vairāgyābhimukhe tasmin navayauvanaśālini |
bhagnavighnagaṇārambhaś cintāṃ lebhe manobhavaḥ ‖ 72.4 ‖

vairāgyābhimu | [2]khe tasmin navayauvanaśālini |
bhagnavighnagaṇārambhaś cintāṃ lebhe mano ○ bhavaḥ ‖

| bai rā gyā bhi mu khe ta smi nna ba yau ba na shā li ni |
| bha gna bhi ghna ga ṇā rā bha shtsi ttaṃ le bhe ma no bha baḥ |

4d cintāṃ] AE (DE JONG); cittaṃ DZ; *citāṃ Ex conj. Ed.

| lang tsho gsar pa dang ldan de | | chags bral la ni mngon phyogs tshe |
| bgegs tshogs rtsom pa nyams pa yis | | yid 'byung gis ni bsam pa thob | 72.4 |

4c rtsom] DZ; brtsom PGN. **4d** gis] PGN; gi DZ.

彼は青年期真っ盛りにあったにもかかわらず、離欲に心を向けたので、心の中に現れる者 (= マーラ) は、一連の妨害行為を開始しようとしていたのを挫かれ、不安を抱いた。

haricandanakastūrīkarpūrāguruvikrayī |
sa kaṃcit kālam akarod vyavahāraṃ pitur girā ‖ 72.5 ‖

haricandanakastūrīkarpūrāguruvikrayī |
sa ka{tha}ñcit kālam akarod vyavahāram pitur girā ‖

| ha ri tsa nda na ka stū ri ka rpū rā ga ru bi kra yī |
| sa ka nytsi tkā ma ka ro dbya ba hā raṃ pi tu rgi rā |

5c kaṃcit] A^{pc}EDZ (Ed.); kathañcit A^{ac}.

| pha yi tshig gis dus 'ga' zhig | ha ri tsan dan gla rtsi dang |
| a ga ru dang ga bur 'tshong | tha snyad rnams ni de yi byas | 72.5 |

彼は父親の言に従い白檀香、麝香、樟脳、沈香を売りながら、幾らかの間、商売を行っていた。

[3] ヴァーサヴァダッターの誘惑とウパグプタの拒絶

[3.1] ヴァーサヴァダッターの誘惑

atha vāsavadattākhyā gandhakrayavisṛṣṭayā |
svadāsyā kathitaṃ śrutvā taṃ rūpaguṇaviśrutam ‖ 72.6 ‖

a[3]tha vāsavadattākhyā gandhakrayavisṛṣṭayā |
svadāsyā kathitaṃ śrutvā taṃ rūpa ○ guṇaviśrutaṃ ‖

| a tha bā pa ba da ttā khyā gandha kra yā bi sri ṣhṭa yā |
| swa dā sya ka thi taṃ shru twā taṃ rū pa gu ṇa bi shru taṃ |

| de nas nor lhas byin zhes pas | | spos ni nyo ru btang ba yis |
| rang gi ’bangs mos de yi gzugs | | yon tan grags pa bshad thos nas | 72.6 |

6b btang] DPGN; gtang Z.

saṃjātarāgasaṃvegā gaṇikā saṃgamārthinī |
visṛjyābhimatāṃ dūtīṃ bhāvaṃ tasmai nyavedayat || 72.7 ||

sañjātarāgasamvegā gaṇikā saṅgamārthinī |
visṛjyābhimatāṃ dūtīṃ bhāvan tasmai nyaveda[4]yat ||

| saṃ dzā ta rā ga saṃ be gā ga ṇi kā saṃ ga mā rthī nī |
| bi sri dzyā bhi ma tā dū tīṃ bhā ba nta smai nya be da yat |

| chags pa’i tshogs ni rab rgyas shing | | ’grogs pa don gnyer smad ’tshong mas |
| mngon par ’dod pa’i pho nya mo | | btang nas de la bsam pa bshad | 72.7 |

7b ’grogs pa] DZ; ’grogs po PGN.

さて、ヴァーサヴァダッターという名の遊女は、香料を買いに行かせた自分の禿が、彼が容姿と美徳で誉れ高い者だと語ったのを聞き、色欲故に興奮して、〔彼と〕交わることを求め、心を許している禿を遣わして彼に心のうちを伝えた。

[3.2] ウパグプタの拒絶

sa svairam arthito dūtyā sasmitas tām abhāṣata |
ayaṃ nābhimataḥ kālas tasyāḥ saṃdarśane mama || 72.8 ||

sa svairam arthito d(ū)tyā sa smitas tām abhāṣat* |
ayaṃ nābhimatā kā ○ las tasyā sandarśane mama ||

| sa svai ra [471a1] ma rthi to dū tyā sa smi ta stā ma bhā ṣha ta |
| a yaṃ nā bhi ma taḥ kā la sta syāḥ sa nda rsha ne ma ma |

| dal gyis pho nya mos don gnyer | | ’dzum ldan de yis der smras pa |
| de dang phrad pa’i dus ’di ni | | bdag la mngon par ’dod pa med | 72.8 |

8a gyis] D; gyi ZPGN.

禿を通して〔ヴァーサヴァダッター〕自らの意志で求愛されると、彼は微笑を浮かべて彼女に言った。「この時点で私がその方にお会いするのは望ましくないでしょう。」と。

atha dūtyāṃ prayātāyāṃ sodvegā gaṇikābhavat |
nānurāge virāge vā niyatir veśayoṣitām || 72.9 ||

atha dūtyām prayātāyāṃ sodvegā gaṇikābhavat |
nānurāge virāge vā niya[5]tir v(v)eśayoṣitāṃ ||

| a tha dū tyāṃ pra yā tā yāṃ so dbe shā ga ṇi kā bha ba t |
| nā nu rā ge bi rā ge bā ni tha ti rbe ṣha yo ṣhi tāṃ |

| de nas pho nya mo 'ongs tshe | | smad 'tshong chags bral ldan par gyur |
| rjes su chags pas chags bral ba | | smad 'tshong ma la nges pa med | 72.9 |

9b gyur] DZ; 'gyur PGN.

さて禿が去って行くと、遊女は狼狽した。愛着に対してであれ、嫌悪に対してであれ、遊女というものは自制することがない[4]。

[4] ヴァーサヴァダッターの奸計

kadācin mandire tasyāḥ sthite yūni vaṇiksute |
navaḥ sārthapatiḥ śrīmān ājagāmottarāpathāt || 72.10 ||

kadācin mandire tasyāḥ sthite yūni vaṇiksute |
navaḥ sārthapatiḥ śrīmān ājagāmottarāpathāt* ||

| ka dā tsi tma ndi re ta syāḥ sthi te yū ni ba ni ksu te |
| na ba sā rtha pa tiḥ shrī mā nā dza gā mo tta ra pa thā t |

| tshong dpon bu ni lang tsho ldan | | nam zhig de yi khyim gnas tshe |
| dpal dang ldan pa'i don mthun bdag | byang gi lam nas gsar du 'ongs | 72.10 |

10c bdag] DZ; dag PGN.

---

[4]STRONG [1993: 76]、引田 [2004: 239] は niyati にそれぞれ "fate"、「運命」という訳を充てる。確かに niyati は通常「運命」という意味で用いられる。しかしこの文脈で niyati をこの意味で解釈すると意味不明である。別の解釈を考えて然るべきであろう。語義派生から検討しよう。niyati の語義派生は ni√yam + KtiN であるから Pāṇini 3.3.94: striyāṃ ktin を根拠にこの文脈に最も適合する意味を考えると「抑制行為」となろう。次に niyati が「抑制行為」という意味で用いられている用例の有無が問題となる。註釈家 Mallinātha (14 世紀) が *Kirātārjunīya* 第二章第 12 詩節に対する註で引用する *Viśvaprakāśa* (12 世紀) には niyatir niyame daive「niyati は『抑制』、『運命』を意味する」とある。従って遅くとも 12 世紀頃には niyati が「抑制行為」という意味で用いられていたことが推定されるが、実際の使用例についてはどうか。これについては SCHMIDT, Nachtr. が„Bezwingung, Selbstbezwingung"の意味で挙げる *Samayamātṛkā* 第七章第七詩節の用例がある。当該詩節とそれに対する和訳を挙げるならば次の如くとなる。テキストは Kāvyamālā 所収本 (Bombay: NSP, 1888) に基づく。

[*Samayamātṛkā* 7.7]
kṣaiṇyakṣāmaṃ śiśirasamayaṃ vṛddham utsṛjya dūre
tyaktvāśītaṃ taruṇam asakṛdgāḍharāgānubandham |
udyānaśrīr madhum abhimataṃ bālam evāliliṅga
prāyaḥ strīṇāṃ vayasi niyatir nāsti kāryārthinīnām ||

冷季という、痩せて衰弱している老人を遠方に捨て去り、暖季という、激しい色欲を何度も何度も起こす若い男を捨て、園林という吉祥天は、春という実に愛しい幼児を抱いた。果たされねばならないことを求める女というものは、年齢期に関して大抵、自制することがない。

d 句が問題となっている第九詩節の cd 句と同じ文構造をとり、ほぼ同じ意味を表示していることは注目に値しよう。以上を考慮すると *Viśvaprakāśa* に見られる niyati の用法が、実際に作品で適用されていたと見て問題なかろう。従って niyati を「抑制行為」という意味に解釈する。

或る時、彼女の住処に商人の若い息子が留まっていると、富裕な隊商主が新客として北の国からやって来た[5]。

visṛṣṭe rātribhogāya tena hemni sahāṃśukaiḥ |
jananyā sahitā lubdhā gaṇikā samacintayat || 72.11 ||

visṛṣṭe rātribhogāya tena hemni sahāṃśukaiḥ |
jananyā sahitā [291a1] lubdhā gaṇikā samacintayat* ||

| bi sri ṣhṭe rā tri bho ga yi te na he mni pa hāṃ shu kaiḥ |
| dza na nyā pa ti tā lu bdhā ga ṇi kā sa ma tsi nta ye t |

| de yi mtshan mo longs spyad slad | | gos dang bcas pa'i gser dag springs |
| brkam chags ldan pa'i smad 'tshong ma | | ma dang bcas pas rab bsams pa | 72.11 |

11c ldan pa'i] DZ; med pa'i PGN, **11d** bcas pas] DZ; bcas pa PGN.

彼は夜を楽しもうとして衣と一緒に黄金をよこして来たので、強欲な遊女は女主人と一緒に考えを巡らせた。

eṣa tāvat sthito gehe vaṇiksūnuḥ kṛtavyayaḥ |
arthī mahādhanaś cānyaḥ kiṃ karomi na vedmi tat || 72.12 ||

eṣa tāvat sthito gehe vaṇiksūnuḥ kṛtavyayaḥ |
arthī mahādhanaś cānyaḥ kiṅ karomi na vedmi tat* ||

| e ṣha tā bat sthi to ge he ba ṇi sū nuḥ kri ta bya yaḥ |
| a rthī ma hā dha na shtsā nyaḥ kiṃ ka ro mi na be dmi tat |

| nor zad byas pa tshong pa'i bu | | 'di ni re zhig khyim na gnas |
| gzhan yang don gnyer nor chen ldan | | bdag gis ci bya de ma rig 72.12 |

12b ni] DZ; na PGN. **12c** gnyer] DZPG; gnyar N. **12d** gis] D; gi ZPGN.

「家にまず最初にいたのはこの商人の息子だ。〔その彼は〕金を惜しまず出している。そして別の客が沢山の財を手にして〔自分を〕求めている。どうすべきだろう。それは見当もつかない。」

vāntavittaḥ punaḥ kāmī na bhavaty adhikapradaḥ |
tena paryuṣitenaiva kriyate niṣphalena kim || 72.13 ||

vāntavittaḥ punaḥ kāmī na bhavaty adhikapradaḥ |
tena prayuṣite | [2]neva kriyate niḥphalena kiṃ ||

| bā nta bi ttaḥ pu naḥ kā mī na bha ba tya dhi ka pra daḥ |
| te na pa ryu ṣhi te nai ba kri ya te ni ṣhpha le na kiṃ |

13a vāntavittaḥ] ADZ (DE JONG); vātavittaḥ E; *vāntacittaḥ Ex conj. Ed. **13c** paryuṣitena] EDZ (Ed.), confirmed by Tib. *yongs rnying par gyur pa*; prayuṣitena A.

| 'dod ldan nor ni skyugs pa dag | phyi nas lhag par ster mi 'gyur |
| 'bras bu med par yongs rnyings par | | gyur pa de yis ci zhig bya | 72.13 |

[5]Tib. は navaḥ「新しい〔隊商主〕」に相当する訳語 gsar du を副詞として ājagāma (Tib. 'ongs) に掛ける形で意訳している。

13b phyi nas] DZ; phyin nas PGN. **13c** rnyings par] D; rnying par Z; rnyings pa PGN. **13d** yis] DZ; yi PGN.

「伊達男は幾度も幾度も財を吐き出しているので、これ以上多くのものを出しはしない。そんな男と実に無駄な一夜を共にして一体何の益があろう[6]。」

navas tv abhinavautsukyāt sarvaṃ muñcaty ayācitaḥ |
apriye 'pi priyāsvādaṃ karoti prathamādaraḥ || 72.14 |

navas tv abhinavotsukyāt sarvva muñcaty ayā ○ citaḥ |
apriye pi priyāsvādaṃ karoti prathamam ādaraḥ ||

| na ba stwa bi na bo tsu kyā tsa rbba mu tsa tya yā tsi taḥ |
| a pri ye pi pri yā swā daṃ ka ro ti pra tha mā da raḥ |

| gsar pa mngon 'dod gsar pa las | | ma bslangs par yang thams cad ster |
| dang por gus pas mi mdza' yang | | mdza' ba nyams su myong bar byed | 72.14 |

14c gus pas mi mdza'] DZPN; gus par ma mdza' G.

「しかし新客は目新しい女を喉から手が出る程望んでいるから、乞われなくても、ありとあらゆるものを差し出すだろう。初めてのものに寄せる関心は、〔当人に〕好ましくないものに対しても、好ましいものとして味わわせてしまうものだ[7]。」

tasmāt kim asya kriyatām antaḥsaktasya śalyavat |
abhogena na yāty eṣa karmabandha ivānugaḥ || 72.15 ||

tasmāt kim asya kriyatām antaḥsaktasya śalyavat(*) |

---

[6]c 句冒頭の tena を Tib. は a 句の kāmin を指すと解し cd 句に'bras bu med par yongs rnyings par gyur pa de yis ci zhig bya「何ももたらさないまでに古されてしまった彼が何の役に立とうか」という訳を充てる。確かに文法上この解釈に問題はない。しかし paryuṣita が限定句として用いられる場合、paryuṣitam annam「鮮度を欠いた食物」、paryuṣitakautukam「失せた関心」というように被限定対象は通常事物もしくは精神状態である。また意味の上でも「馴染みの彼が何の益をもたらそうか」というのは意味不明である。尤も paryuṣita が行為名詞として用いられる用例がない点に問題はあるが、本訳では tena を同伴の具格に解し「彼 (= 伊達男) と共に実に無駄な一夜を過ごすことに何の益があろうか」と読む解釈をとる。

[7]詩節の構造は単純だが意味する所は難しい。どう解釈するか。ab 句から見て行くと冒頭の navaḥ が指すのは「新参客」すなわち「隊商主」と思われる。次に abhinavautsukyāt が問題となるが、格限定複合語として abhinavāyām autsukyāt「目新しい女に対して首を長くしてそわそわしている状態」と解釈出来よう。これに従って第 13 詩節との対比に注意しながら ab 句を解釈すると「しかし新客 (navaḥ = 隊商主) は、目新しい女 (abhinavā ° = 遊女自身) を欲してそわそわとしている状態にあるので (°autsukyāt)、乞われなくても、ありとあらゆるものを差し出すだろう。」と解釈出来よう。

cd 句が述べているのはヴァーサヴァダッターの見解、一般論双方の可能性がある。前者の場合、priyāsvādaṃ と prathamādaraḥ はそれぞれ priyāyā āsvādaṃ「愛しい女を享受する行為」という格限定複合語、prathamāyām ādaro yasya saḥ「〔自分にとって〕一番の女のことを気に掛ける男」という所有複合語に解釈出来よう。これを基に後続する第 15 詩節と意味的な連関を考慮しながら解釈すれば「〔自分にとって〕一番の女のことが気に掛かっている男 (prathamādaraḥ = 隊商主) は、恋敵 (apriye = 商人の息子) がいようと、愛しい女 (priyā° = 遊女自身) を享受しようとするだろう〔故に、商人の息子を殺害するより他ない〕」となろう。後者の場合、prathamādaraḥ は prathamasyādaraḥ「初めてのものに対する関心」という格限定複合語に、priyāsvādaṃ は priyaṃ (priyeṇa) āsvādaḥ「好ましい形で味わう行為」という格限定複合語に解せよう。従って全体は「初めてのものに寄せる関心は、好ましくないものに対しても好ましいものとして味わわせてしまうものだ」となろう。文法的にはいずれも可能であろうが、恋敵がいるので愛しい女を諦めるという考えはインドの恋愛詩の事例に照らし余り一般的ではないであろう。本訳では後者をとる。cd 句の一般論としての解釈は横地優子先生の御教示に負う。

[3]abhogena na yāty eṣa karmmabandha ivānugaḥ ||

| ta smā tki ma [471b1] sya kri ya tā ma ntaḥ pa kta sya sha lya ba t |
| a bho ge na na yā tye ṣha ka rma ba ndhe ba a nu gaḥ |

| de slad nang du zug rngu bzhin | | | zhugs pa ’di la ci zhig bya |
| las kyi ’ching bzhin rjes ’brang ’di | | ma spyod par ni ’gro ma yin | 72.15 |

15c kyi] ZPGN; kyis D. || bzhin] DZ; zhing PGN. || rjes] DZPG; rjas N. **15d** spyod] P; spyad GN; bcad DZ.

「それ故、鏃のように中に居座って離れないこの男をどうしたらいいだろうか。この男は〔私を〕楽しむことなしには去っては行かない。〔行為をなした者の〕後を追う業の束縛のように。」

nāsmākam etad vāṇijyaṃ tyajyate yadi vittavān |
na dharmāya na kāmāya vayam arthāya nirmitāḥ || 72.16 ||

nākasmākam etad vāṇijyan tya ○ (jy)ate yadi vittavān |
na dharmmāya na kāmāya vayam arthāya ni(r)mitāḥ ||

| nā smā ka me ta dba ṇi dzyaṃ tya dzya te ya di bi tta ba n |
| na dha rmmā ya na kā mā ya ba ya ma rthā ya ni rmmi tāḥ |

| gal te nor ldan ’di btang na | | bdag cag la ni tshong khe med |
| chos phyir ma yin ’dod phyir min | | bdag cag nor gyi phyir du sprul | 72.16 |

16a na] DZ; nas PGN.

「もし財ある男を捨ててしまえば、我々はこの商売を営めない。我々は法でも愛でもなく実利を求めるべく世に送り出された者なのだから。」

[5] ヴァーサヴァダッターによる商人の息子殺害

iti saṃcintya sā mātuḥ saṃmate draviṇārthinī |
varāsavena nyavadhīt saviṣeṇa vaṇiksutam || 72.17 ||

iti sañcintya sā mātuḥ sammate dravi[4]ṇārthinī
varāsavena nyavadhīt* saviṣeṇa vaṇiksutaṃ ||

| i ti saṃ tsi ntya sā mā tuḥ sa mma te dra bi nā rthi nī |
| ba rā pa be na nya ba dhā tsa bi ṣhe ṇa ba ni ksu taḥ |

| zhes bsams nor ni don gnyer ma | | de yis ma yi gros kyis ni |
| chang mchog dug ldan blud pa yis | | tshong pa’i bu ni rab tu bsad | 72.17 |

このように思いをめぐらせて、女主人の同意を得ると、彼女は財を求めて毒入りの味の良い火酒を用いて商人の息子を殺害した[8]。

[8]Tib. は blud pa yis「〔毒入りの火酒を〕飲ませることで」と語を補って訳している。

nikṣipyāvaskaracaye tatas taṃ gatajīvitam |
*avāpa vipulaṃ vittaṃ sārthavāhaṃ praveśya sā || 72.18 ||

nikṣipyāva ○ skaracaye tatas taṃ gatajīvitaṃ |
avāpya vipulam vittaṃ sārthavāhaṃ praveśya sā ||

| ni kṣhi sya ba ska ra tsa ye ta tsa ye ta ta staṃ ga ta dzī bi taṃ |
| a bā pya bi pu laṃ bi ttaṃ sā rtha ba haṃ pu ri shya pā |

18c *avāpa] Ex conj. Tib. *thob*; avāpya AEDZ (Ed.).

| de nas srog dang bral ba de | | phyag dar khrod kyi phung por sbas |
| ded dpon nang du rab bcug nas | | de yis nor ni rgya chen thob | 72.18 |

18d yis] DZ; yi PGN. || chen] DZ; che PGN (also correct).

それから死んだ彼を汚物の山に投じ[9]、彼女は隊商主を招き入れ莫大な財を得た[10]。

dṛṣṭaḥ praviṣṭo gaṇikāgṛhaṃ na tu vinirgataḥ |
iti bandhubhir anviṣya vyasuḥ prāpto vaṇiksutaḥ || 72.19 ||

dṛṣṭaḥ praviṣṭo gaṇikā[5]gṛhaṃ na tu vinirgātaḥ |
iti vandhubhir anviṣya (na) vyaśuḥ prāpto vaṇiksutaḥ ||

| dri ṣṭaḥ pra bi ṣhṭo ga ṇi kā gri haṃ na bhu bi ni rga taḥ |
| i ti ba ndhu bhi ra nwi ṣhya bya su la bdho ba ni gsu taḥ |

19d prāpto] AE (Ed.); labdho DZ.

| smad 'tshong ma yi khang par ni | | 'jug pa mthong ste phyir 'thon min |
| zhes te gnyen rnams kyis btsal bas | | tshong pa'i bu ni srog bral rnyed | 72.19 |

19c gnyen] ZPGN; gnyis D.

「〔息子が〕娼館に入って行くのは見たが、出て来るのは〔見て〕いない。」と〔考えて〕、親族らが捜索した所、死んだ商人の息子の所に辿り着いた。

[6] ヴァーサヴァダッターの処刑

tatas tadvadhasaṃtaptaiḥ śrāvitas tair mahīpatiḥ |
veśyāyās tīvrapāpārham ādideśogranigraham || 72.20 ||

tatas tadvadhasantapt(ai)ḥ śrāvitas tair mmahīpatiḥ |
veśyāyās tīvrapāpārham ādideśāgranigrahaṃ ||

---

[9]nikṣipya「投じて」に相当する個所を Tib. は sbas「隠して」と意訳する。

[10]c 句冒頭を梵文写本、梵文音写は avāpya という連続体の形で提示する。しかし前後の詩節との意味の連関を考えても、この箇所には定動詞が期待されるべきである。連続体を定動詞の代用とする用例は確かに Mātṛceṭa といった古い時代の仏教詩人の作品には存在する (用例については *Varṇārhavarṇa* 第二章第 55 詩節とそれに対する HARTMANN [1987: 122] の訳注を見よ)。しかし Kṣemendra が属した時代の美文詩人にとってこの用法が慣例的にあったことを示す用例は管見の及ぶ限り見出されない。ここでは対応する Tib. thob に従い avāpya を *avāpa に訂正する。

| ta ta sta dba dha saṃ ta ptaiḥ shrā bi ta stai rmma hī pa tiḥ |
| bai shyā yā stī bra pā pā rha mā di de sho gra ni gra haṃ |

20c ādideśogra°] DZ (Ed.), confirmed by Tib. *mi bzad ... bstan*; ādideśāgra° AE.

| de nas de bsad gdung ba can || de dag gis gsol sa bdag gis |
| sdig drag la 'os chad pa ni || mi bzad smad 'tshong ma la bstan | 72.20 |

20b de dag gis] DZG; de dag gi PN.

それから彼等は彼を殺された苦しみの熱に苛まれて王に〔一件を〕上奏した。〔王は〕重罪に見合った恐ろしい罰を遊女に課すことを命じた[11]。

sā vadhyavasudhāṃ nītā muktakeśī nirambarā |
nikṛttapāṇicaraṇā chinnaśravaṇanāsikā || 72.21 ||

sā vadhyavasudhā [291b1] nītā muktakaśī nirambarā |
nikṛttapāṇicaraṇā cchinnaśravaṇanāśikā |

| sā ba dhya ba su dhāṃ nī tā mu kta ke ṣhī ni ra mba rā |
| ni kri tta pā ṇi tsa ra ṇā tstshi nna shra ma ṇa nā si kā |

| skra grol gos dang bral ba de || gsod sa yi ni sar khrid de |
| lag pa rkang pa rab bcad cing || rna ba dang ni sna yang bcad | 72.21 |

彼女は髪をほどかれ衣を剥がれて刑場に連れて行かれ、手足を切られ耳鼻を削がれた。

*ceṣṭayantī vyathākrāntā nijaśoṇitakardame |
nivāryamāṇakravyādā dāsyā cukrośa bandhakī || 72.22 ||

viveṣṭayantī vyathākrāntā nijaśoṇitakarddame |
nivāryamāṇakravyādā dāsyā cukrośa bandhakī ||

| be be pta ntyā bya thā krā ntā ni dza sho ṇi ta ga rdha [472a1] me |
| ni bā rya mā ṇa kra bya dā dā syā tsu kro ṣha ba ndhu kā |

22a *ceṣṭayantī] Ex conj. Tib. *'gre ldog byed*; viveṣṭayantī A; veṣṭayantī E (Ed.); bebeptantyā DZ.

| rang gi khrag gi 'dam la ni || gdung bas nyen cing 'gre ldog byed |
| sha za zlog cing 'phyon ma ni || 'bangs mor bcas pa mya ngan byed | 72.22 |

22b 'gre ldog] PN; 'dre ldog DZ; 'gro ldog G. **22c** zlog] PGN; log DZ. || 'phyon] ZPGN; 'phyan D.

遊女は自分の血糊の上でのたうち回り[12]、苦痛に打ちひしがれ、禿に肉を啄む動物を追い払って貰いながらも[13]、泣き喚いた。

[11]cd 句は「〔王は〕遊女が犯した重罪に見合った恐ろしい罰を命じた」とも解釈可能である。但しこの場合 veśyāyās「遊女」が tīvrapāpa°「重罪」という、複合語の前分要素のみを限定することになる。

[12]梵文写本と梵文音写は a 句冒頭部のテキストを正しく伝えない。校訂本は梵文写本 E が示す veṣṭayantī「覆っている」、「取り囲んでいる」という読みを採る。しかしこれでは veṣṭayantīの目的語が文脈から理解され得ず遊女が何を「覆っている」のか不明である。対応する Tib. はこれに'gre ldog byed という訳を充てており、これは NEGI が挙げる Av-klp 第 101 章第 19 詩節の用例によると viceṣṭamānā の訳語とされる。従って Tib. が基にした写本は *ceṣṭayantī「〔身を〕ばたつかせて」、「もがきながら」という読みを伝えていたことが推定される。"ve" と "ce" の字形の問題は重要でないから *ceṣṭayantīを本来の読みと見るべきであろう。

[13]Tib. は dāsyā を同伴を意味する具格に解し'bangs mor bcas pa「禿を伴って」という訳を充てる。

[7] ウパグプタの出現

upaguptas tatas tasyāḥ śrutvā viṣamavaiśasam |
tadvilokanakālo 'yam ity uktvā tāṃ bhuvaṃ yayau || 72.23 ||

upaguptas tatas tasyāḥ [2] śrutvā viṣamavaiśaśaṃ |
tadvilokanakālo yam ity uktvā tāṃ bhuvaṃ yayau ||

| u pa gu pta sta ta sta syāḥ shru twā bi sha ṃa bai sha saṃ |
| ta dvi lo ka na kā lo ya mi tyu ktwā taṃ bhū baṃ ya yau |

| de nas de yi sdug bsngal ni | | mi bzad nyer sbas kyis thos nas |
| de lta ba yi dus 'di zhes | | brjod nas sa gzhi de ru song | 72.23 |

23b nyer] DZGN; nye P. **23c** de lta ba yi] PGN; de ni blta ba'i DZ.

それからウパグプタは彼女に降りかかった恐ろしい不幸のことを耳にして、「今が彼女と会うべき時だ。」と言って、その場所に赴いた。

dāsyā niveditaṃ dṛṣṭvā tam āyātaṃ śaśidyutim |
pūrvābhilāṣaśeṣeṇa sā lajjākuṭilābhavat || 72.24 ||

○ dāsyā nive(d)itan dṛṣṭvā tam āyātaṃ śaśidyutiṃ |
pūrvvābhilāṣaśeṣeṇa sā lajjākuṭilābhavat* ||

| dā syā ni bi de taṃ dri ṣhṭwā ta mā yā ntaṃ sha sha dyu tiṃ |
| pū rbbā bhi lā ṣha she ṣhe ṇa sā la dzdza ku ṭi lā bha ba t |

24b āyātaṃ] A (DE JONG); āyāntaṃ EDZ (Ed.).

| zla 'od can de 'ong ba ni | | 'bangs mos bshad pa mthong gyur nas |
| sngon gyi mngon 'dod lhag ma yis | | ngo tsha ldan zhing gya gyur gyur | 72.24 |

24d gya gyur] ZPGN; gyu gyur D.

禿を通して聞き及んでいた彼が月光のような光を放ちながらやって来たのを見て、彼女は以前抱いていた愛着の残りのせいで、はじらってうつむいた。

antaḥpraviṣṭaḥ kenāpi vāsanābhyāsavartmanā |
na kasyāṃcid avasthāyāṃ rāgas tyajati dehinām || 72.25 ||

antaḥpra[3]viṣṭaḥ kenāpi vāsanābhyāsavartmanā |
na kasyāñcid avasthāyāṃ rāgas tya ○ jati dehinā(m) ||

| a ntaḥ pra bi ṣhṭaḥ ke nā pi bā pa nā bhya pa ba rtma na |
| na ka syaṃ tsi da ba sthā yāṃ rā ga stya dza ti de hi nāṃ |

| bag chags goms pa dag gi lam | | 'ga' las nang du rab zhugs pa |
| lus can rnams kyi chags pa ni | | gnas skabs 'gar yang gtong mi 'gyur | 72.25 |

25a gi] PGN; gis DZ. **25d** gtong] ZPGN; btang D.

無意識のうちに繰り返し心に印象を植え付ける働きという道は[14]、どんなものとも知れないものだが、それを通じて内に入ってしまえば、人というものが持つ色欲は、どんな態になろうが〔人から〕離れることがない[15]。

jaghanāvaraṇaṃ kṛtvā dāsyā vasanapallavam |
sā stananyastahastā taṃ babhāṣe vinatānanā || 72.26 ||

jaghanāvaraṇaṃ kṛtvā dāsyā vasanapallavaṃ |
sā stananyastahastā tam babhāṣe vinatānanā ||

| dza gha nā ba ra ṇaṃ kri twā dā syā ba sa na pa lla baṃ |
| pā sta na nya sta ha sta taṃ ba bhā ṣhe bi nī tā na nā |

| 'bangs mo'i gos kyi 'dab ma yis | | mdoms ni rab tu bsgribs byas shing |
| nu mar lag bkod bzhin ras ni | | rab dud de yis de la smras | 72.26 |

26a kyi] DZPN; kyis G. **26b** mdoms] DZ; 'doms PGN (also correct). **26d** yis] DZPN; yi G.

禿に衣の切れ端で臀部を覆って貰い[16]、手を胸に置いて貰い、彼女は俯いたまま彼に言った。

prayatnenāpi mahatā nāyātas tvaṃ mayārthitaḥ |
adhunā mandabhāgyāyās tava saṃdarśanena kim || 72.27 ||

praya[4]tnenāpi mahatā (n)āyātas tva(ṃ) mayārthitaḥ |
adhunā mandabhāgyāyās tava sandarśa ○ nena kiṃ ||

| pra ya tne nā pi ma ha tā nā yā ta stwaṃ ma yā rthi taḥ |
| a dhu na ma nda bhā gyā yā sta ba saṃ da rṣha ne na kiṃ |

| bdag gis 'bad pa chen po yis | | don du gnyer yang khyod ma 'ongs |
| da lta skal ba zhan pa bdag | mthong ba yis ni khyod la ci | 72.27 |

「私は非常に腐心して貴方を求めましたが、〔貴方は私の所へ〕来て下さいませんでした。薄幸な〔私が〕爾と今頃お会いして何の意味がありましょう。」

yadā mamābhavat ko 'pi bhogyasaubhāgyavibhramaḥ |
na darśanasya kālo 'yam ity uktaṃ bhavatā tadā || 72.28 ||

yadā mamābhavat ko pi bhogyasaubhāgyavibhramaḥ |
na darśanasya kālo yam ity uktam bhavatā tadā ||

| ya dā ma yā bha ba tko pi bhau gya sau bhā gya bi bhra maḥ |
| na da rṣha na sya kā lo yam i tyu ktaṃ bha ba tā ta dā |

[14]直訳は「無意識下に印象を植え付ける働きの反復作用という道を通って」である。

[15]d 句末は梵文写本二本では dehinā (単数・具格)、Tib. と梵文音写では dehināṃ (複数・属格) となっている。しかしこれでは定動詞 tyajati の目的語を欠き解釈が難しくなる。DE JONG はこれを避けようとして dehināṃ を dehinaḥ と読むことを提案するが、dehināṃ 或いは dehinā を dehinaḥ と訂正すると写本の読みから乖離することになる。また Tib. からも支持されない。鼻音符号の欠落は写本では頻繁に起こる現象であり、且つ当該詩節は一般論を述べる内容と思われるので、校訂本通り梵文音写及び Tib. の dehināṃ (複数・属格) という読みを採用し、tyajati の目的語に意味上 dehinam「身体を」を補って読む解釈を提案する。

[16]Tib. の ab 句は'bangs mo'i gos kyi 'dab ma yis mdoms ni rab tu bsgribs byas shing「禿の衣の切れで臀部を隠して貰い」とあり、梵本 b 句の dāsyā を単数・属格と理解したらしい。

28b bhogya°] A, confirmed by Tib. *longs spyod*; bhāgya° E (Ed.); bhaugya° DZ.

| gang tshe bdag ni longs spyod kyi | | skal bzang rnam 'phrul ci yang ldan |
| de yi tshe na khyod kyis ni | | blta ba'i dus 'di min zhes smras | 72.28 |

28a ni] DZ; gi PGN. || spyod] ZPGN; spyad D. || kyi] PGN; kyis DZ. **28c** yi] DZPN; om. G (unmetrical). **28d** min] ZPGN; yin D.

「どんなものだったのかは知りませんが、楽しまれるはずだった幸福で私が心ときめいていた時[17]、貴方様は『今は会うべき時ではない。』と仰いました。」

kṛttāṅgī rudhirādigdhā cyutāhaṃ kleśasāgare |
kālaḥ kamalapattrākṣa kim ayaṃ darśanasya me || 72.29 ||

kṛ[5]ttāṃ(g)ī rudhirādigdhā cyutāhaṃ kleśasāgare |
kālaḥ kamalapatrākṣa kim ayaṃ darśanasya me ||

| kri ttāṃ gī ru dhi ra dhi rā di gdhā tsyu tā haṃ kle sha sā ga re |
| kā laḥ ka ma la pa trā [472b1] kṣhi ki ma ya nda rṣha na sya te |

| yan lag bcad cing khrag gis bgos | | nyon mongs rgya mtshor lhung ba bdag
| lta ba yi ni dus 'di dag | pa dma'i mig can khyod kyis ci | 72.29 |

29a gis] DZ; gi PGN. || bgos] PGN; bsgos DZ. **29b** lhung ba bdag] ZPGN; lhung bdag D (unmetrical). **29c** lta] DZ; blta PGN. **29d** kyis ci] D; kyi ci ZPN; kyis ni G.

「私は手足を切られ血にまみれ苦しみの海に沈んでいます。蓮瓣のような眼をした御方よ、今この時が私と会う時なのですか。」

iti bruvāṇāṃ bāṣpāmbuplāvyamānāṃśukāñcalām |
śanakair upaguptas tāṃ sānutāpam abhāṣata || 72.30 ||

iti bruvāṇāṃ bāṣpāmbuplāvyamānā(ṃśu)kāñcalām |
śanakair upaguptas tā(ṃ) sānutāpam abhāṣata ||

| i ti bru bā ṇāṃ bā ṣhpāṃ bu plā bya mā nāṃ shu kāṃ tsa lāṃ |
| sha na kai ru pa gu pta stāṃ sā nu tā pā ma bhā ṣha ta |

| zhes pa smra zhing mchi ma yi | | chu yis gos kyi mtha' dag bslad |
| rjes su gdung ba can de la | | dal gyis nyer sbas kyis smras pa | 72.30 |

30a smra] DZPN; smra ba G (unmetrical).

かく涙で衣の裾を濡らしながら語る彼女に、ウパグプタは苦しみを分かち合う気持ちを起こして徐に語った。

[17]b 句冒頭の校訂本の読みは bhāgyasaubhāgya° である。同じ読みの用例は *Matsyapurāṇa* 第 54 章第四詩節にある (章・詩節番号は ASS 叢書のそれに従う)。しかしこの文脈には適合しない。*Matsyapurāṇa* 54.4: bhagavan devadeveśa brahmaviṣṇvindranāyaka | śrīmadārogyarūpāyurbhāgyasaubhāgyasampadā | saṃyuktas tava viṣṇor vā pumān bhaktaḥ kathaṃ bhavet || (「神々の主達の上首よ、梵天とヴィシュヌとインドラを統率する者よ、バガヴァットよ、爾やヴィシュヌに信愛を抱く人がどうして健康と美貌と寿命と幸福と繁栄の栄えある成就を手にすることになるのか。」)。また校訂本の読みを採るならばbhāgyasaubhāgya° という〈同音反復〉(yamaka) が成立することになるが、最古の写本 A と Tib が bhogyasaubhāgya° (Tib. longs spyod kyi skal bzang) という読みを伝えていることに注意すべきである。梵文音写もやや壊れているものの bhaugyasaubhāgya° という読みを示す。確かにこの読みは用例に支持されないが、用例はあくまで状況証拠に過ぎないから写本 A の読みを採用すべきであろう。

[8] ウパグプタによる不浄観教示

kāntiś candrasakhī suvarṇakadalīlāvaṇyacauraṃ vapur
vaktraṃ padmanimīlanaṃ kuvalayaklaibyaprade locane |
naitan me dayitaṃ manoharataraṃ kiṃ tu prayatnād ahaṃ
kāmānāṃ prakṛtiṃ vicāravirasāṃ draṣṭuṃ samabhyāgataḥ || 72.31 ||

kānti[292a1]ś candrasakhī suvarṇakadalīlāvaṇyacauraṃ vapuḥ
vaktrapadmanimīlanaṃ kuvalayaklaibyaprade locane |
netan me dayitaṃ manoharataraṃ kin tu prayatnād ahaṃ
kāmānāṃ prakṛtim vicāravirasāṃ draṣṭuṃ sama | [2] bhyāgataḥ ||

| kā nti shtsa ndrā sa khī su ba rṇṇa ka da lī lā ba ṇya tsau raṃ ba pu
rbba ktraṃ pa dma ni mī la naṃ ku ba la ya kli bya pra de lo tsa ne |
| nai rmme mo da yi taṃ ma no ha ra ta raṃ kiṃ tu pra ya tnā da haṃ
kā mā nāṃ pra kri tiṃ bi tsā ra bi ra sāṃ dra ṣhṭuṃ sa ma bhyā ga taḥ |

31a candrasakhī] AE; candrāsakhī DZ; *candra sakhī Ex conj. Ed; *candrasukhī Ex conj. DE JONG.

| mdzes sdug zla ba'i grogs dang lus ni gser gyi chu shing mdzes pa'i rkun po dang |
| bzhin ras pa dmo zum byed mig ni u tpa la dag la dman pa ster byed pa |
| shin tu yid 'phrog de dag rnams la bdag ni mi dga 'on kyang 'bad pas bdag
| rnam par dpyad nas ro dang bral ba 'dod pa rnams kyi rang bzhin lta ru 'ongs | 72.31 |

31c yid 'phrog] DZPN; yid 'phrog pa G (unmetrical). **31d** dpyad nas] PGN; spyad na DZ. || lta ru] DZPN; lta bur G.

「月を友とする輝き[18]、黄金色の芭蕉の実の眩ささえ奪う美しい容姿[19]、蓮の華さえも閉ざしめてしまう顔、睡蓮の花瓣さえも萎びさせてしまう二つの眼、私はこれを愛おしくも、とても魅力的だとも感じない。にも拘らず、私が苦労の末やって来たのは、愛欲というものの本来的な性質が、〔それを〕深く考察すれば内実がないものだということをこの目で確かめる為にだ。」

vibhūṣaṇāṃśukacchanne varasaurabhavāsite |
śobhā tavābhavat kāye svabhāvaḥ punar īdṛśaḥ || 72.32 ||

vibhūṣaṇāṃśukacchanne varasaurabha(v)āṣite |
śobhā tavābhavat kā ○ ye svabhāva punar īdṛśaḥ ||

| bi bhū ṣha ṇaṃ shu ka tstsha nnai ba ra sau ra bha bā si te |
| sho bhā ta bā bha ba tkā ye swa bhā baḥ pu na rī dri shaḥ |

| rgyan dang gos kyis rab bsgribs shing | | dri bzang mchog gis rab bsgos pa |
| khyod kyi lus ni mdzes pa dag | slar yang rang bzhin 'di 'drar gyur | 72.32 |

32a kyis] DZ; kyi PGN. **32d** 'drar] DZPN; 'dra G.

[18]DE JONG は校訂本に candra sukhīとあるのを candrasukhīと修正すべきであると指摘するが、校訂本には candra sukhīではなく candra sakhīとある。テキストの見誤りであろう。

[19]当該箇所が意味する所が分かりにくい。これについては Narahari (14 世紀) の医薬辞典 *Rājanighaṇṭu* の suvarṇakadalīの項 (第 11 章第 44–45 詩節) が参考になる。当該箇所には同意語として hemaphalā「黄金色の実を結ぶもの」、kanakastambhā「黄金色の房を持つもの」という名が列挙されている。これから判断すると、当該箇所では「眩さ」を共通属性として、ヴァーサヴァダッターの容姿と金色の芭蕉の実が対比されていることが知られよう。

「貴女の、装飾具や衣に包まれ、とても芳しい香りに薫習されていた身体は光輝を発していた。だが〔その体にあった〕本来の性質とは、このようなものであったのだ。」

bata bata nihatās te kīrṇakeśāsthisaṃsthe
satatam analatāpotpacyamānākhilāṅge |
kuṇapavati ramante ye jugupsānidhāne
vyasanagaṇavidhāne kāyanāmni śmaśāne || 72.33 ||

bata bata nihatās te kīrṇṇakeśāsthisaṃsthe
satatam analatāpotpacyamānākhilā[3]ṅge
kuṇapavati ramante ye jugupsānidh(ā)n(e)
vyasanagaṇavidhāne kāyanā ○ mni śmaśāne ||

| ba ta ba ta ni ha tā ste kī rṇṇa ke shā sthi saṃ sthe
pa ta ta ma na la tā po tpa tsya mā nā khi lāṃ ge |
| ku ṇa pa ba ti ra ma ṣhṭā ye dzu gu psā ni dhā ne
bya sa na ga ṇa ni dhā ne kā ya nā mni shma shā ne |

33d °vidhāne] AE; °nidhāne DZ (Ed.), Tib. has *gter* (*nidhāne). Cf. DE JONG.

| skra dang rus pas gang ba'i dbyibs can rtag tu me yis ni |
| yan lag ma lus rab 'tshed rnag khrag dang ldan smad pa'i gnas |
| lus kyi ming can dur khrod sdug bsngal tshogs kyi gter dag la |
| gang zhig dga' ba de dag kyi hud kyi hud brlag par gyur | 72.33 |

33a yis] DZ; yi PGN. **33d** gang zhig] PGN; gang gi DZ. || gyur] PGN; 'gyur DZ.

「身体と呼ばれるものは、骨に張り付いており、〔そこから生える〕髪は乱れ、〔消化の〕火の熱で四肢全体が絶えず熱せられており、汚物を宿し、嫌悪が向けられるものであり、一群の不幸をもたらす。〔その身体と呼ばれるものは〕火葬場に他ならない。〔というのも、火葬場も屍の〕髪が散らかり、骨と共にあり、〔火葬の〕火の熱で〔そこにある屍の〕四肢全体が絶えず炙られており、死屍累々たる、嫌悪が向けられるものであり、一群の不幸をもたらすものだから。〔そこに〕喜びを覚えるのは、あぁ、殺されてしまった者達だ[20]。」

visyandini durāmode vikṛtacchidrasaṃkule |
aho mohān manuṣyāṇāṃ kāye 'pi priyabhāvanā || 72.34 ||

[20]詩節構造は単純だが、テキスト伝承と解釈の点で難解な詩節である。順に問題を検討しよう。DE JONG が指摘する通り c 句冒頭部にはネパール系伝承とチベット系伝承との間で乖離がある。前者は vyasanagaṇa-vidhāne、後者は vyasanagaṇanidhāne という読みを示す。どちらを採用すべきか問題となるが、DE JONG は校訂本の読みを Tib. が支持すると述べて考えを留保する。しかしこの場合前者を採るべきではないか。つまり °nidhāne という読みを採る場合、直前に jugupsānidhāne とあるので全く同一の語を反復することになる。Kṣemendra が〈同音反復〉を駆使している詩節もあるにはあるが (例えば Av-klp 第 59 章第 19 詩節を見よ)、脚頭、脚末でもない箇所で vyasanagaṇa° という長い語を介在させる形で同一語を反復しているのは不自然に思われる。ここではネパール系の読みを本来の読みと見做す。

次に詩節解釈の問題に移ろう。a 句の kīrṇakeśāsthisaṃsthe には多様な解釈の余地がある。当該詩節に適用された〈掛詞を用いた隠喩〉(本論 3.1 参照) を考慮すれば、kīrṇakeśa「髪が散らばっている (kīrṇaḥ keśo yasya/yasmin tasmin)」と asthisaṃstha「骨に/の近くにあるもの (asthiṣu yat saṃtiṣṭhati tasmin)」からなる同格限定複合語と見做すべきであろう。c 句冒頭の kuṇapa には「屍」、「排泄物」の二義が読み込まれねばならないが用例面で問題が残る。註釈家 Bhānuji Dīkṣita は *Amarakośa* における kuṇapa の説明で *Viśvakośa* と *Medhinīkośa* から kuṇapaḥ pūtigandhe śave 'pi ca「kuṇapa は排泄物、屍も意味し得る」という一節を引用する (Bombay: NSP, 1915, 301)。従って 12 世紀頃には kuṇapa を「排泄物」の意味で用いていたことが知られる。しかし管見の及ぶ限りでは実例を見出し得ない。

visyandini durāmode vikṛtachidrasaṅkule |
aho mohā(n) manuṣyāṇāṃ kāye pi priyabhā[4]vanā ||

| ba shī ndi ni du rā mo de bi kri ta tstshi drā saṃ ku le |
| a ho mo [473a1] hā nma nu ṣhyā ṇāṃ kā ye bi pri ya bhā ba nā |

| kye ma rmongs las mi rnams ni | | rnam par zag cing dri nga can |
| rnam 'gyur bug pas gang gyur pa'i | | lus po la yang dga' ba bsgom | 72.34 |

34a mi] DZ; 'di PGN.

「ああ、人というものは〔腐って〕流れ滴る、異臭を放つ、いたんで穴だらけになっている身体に対してさえ[21]、心の迷いの故に『愛しいものだ』という思い込みを抱くものだ。」

sāpāyaḥ kāyaparyāyamāyāviṣayasaṃśrayaḥ |
duḥkhaskandhaḥ kṣayaṃ yāti sugatopāsanād ayam || 72.35 ||

sāpāyaḥ kāyapa(r)yāyamāyāviṣayasaṃśrayaḥ |
duḥkhaskandhaḥ kṣayya(ṃ) ○ yāti sugatopāsanād ayaṃ ||

| pa pā yaḥ kā ya pa ryā ya mā yā bi ṣha ma saṃ shra yaḥ |
| duḥ kha ska ndhaḥ kṣha yaṃ yā ti su ga to pā pa nā da yaṃ |

35b °viṣaya°] AE (Ed.); °viṣama° DZ, Tib. has *mi bzad* (*viṣama).

| bde gshegs nye bar bsten pa las | | lus kyi rnam grangs gnod pa can |
| mi bzad sgyu ma dag gi gnas | | sdug bsngal phung po 'di zad 'gyur | 72.35 |

「生起消滅の術現の対象である身体に依拠する、悪趣と共にあるこの一群の苦しみは[22]、直向きに善逝に心を向けることで消滅する。」

mohadhvāntadivākarasya sakalakleśāvakāśacchidaḥ
śāstuḥ śāsanasaṃśraye praṇihitaṃ kalyāṇamitrasya yaiḥ |
naiva klinnakaraṅkapaṅkakalite kīrṇāntramālākule
te majjanti vikārabhāji narake kāyābhidhāne punaḥ || 72.36 ||

mohadhvāntadivākarasya sakalakleśāvakāśacchidaḥ
śāstuḥ śāsanasaṃśraye[5]praṇihitakalyāṇamitras(y)a y(ai)ḥ
naiva klinnakaraṅka(p)aṅka(k)a(l)it(e) kīr(ṇṇ)āntramālākule
te majjanti vikārabhāji narake kāyābhidhāne punaḥ ||

| mo ha dhwā nta di bā ka ra sya sa ka la kle shā ba bā sa tstshi daḥ
shā stuḥ shā sa na saṃ shra ye pra ṇi hi taṃ ka lyā ṇa mi tra sya yaiḥ |
| nai ba kli nna pu naḥ ka raṃ ka ka li le kī rṇṇā ntra mā lā ku le
te ma dzdza nti kā ra bhā dza na ra ke kā yā bhi dhā ne ṣhu naḥ |

[21] vikṛtacchidrasaṃkule は「歪な形をとった穴でいっぱいの」とも解釈可能である。

[22] DE JONG が指摘するように、ab 句の kāya° 以下はネパール系写本とチベット系伝本で解釈が異なる。前者は kāyaparyāyamāyāviṣayasaṃśrayaḥ「生起消滅の術現の対象である身体に依拠する」、後者は kāyaparyāyamāyāviṣamasaṃśrayaḥ (Tib. lus kyi rnam grangs ... mi bzad sgyu ma dag gi gnas)「身体という、生起消滅の術現の恐ろしい拠り所」という読みを提示する。しかし "ma" と "ya" という字形から判断して、DE JONG が指摘する通り °viṣaya° が本来の読みと見て間違いなかろう。

36c °karaṅka°] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *keng rus*; *°kalaṅka° Ex conj. Ed. ‖ *°kalite] A (Ed.); °kalile EDZ.

| rmongs pa'i mun pa dag gi nyin byed nyon mongs gnas skabs mtha' dag gcod byed pa |
| ston pa'i bstan pa'i gnas la gang dag gis ni dge ba'i grogs kyi smon lam btab |
| de dag lus zhes brjod pa'i dmyal ba dman pa'i keng rus dra bas gang gyur cing |
| rgyu ma'i 'phreng ba rgyas pas dkrigs pa'i rnam 'gyur snod du slar yang lhung mi 'gyur | 72.36 |

36c keng] DZGN; kang P.

「師は迷妄という暗闇を照らす太陽であり、あらゆる苦のきっかけを断ずる善き友である。彼の教えという身の寄せ場に心を向ける者というのは、〔体液で〕湿った頭蓋骨と過失を宿し、〔体内の〕四方八方に広がる一続きの腸で満ち、醜く姿が変わっていくことを免れない身体という名を持つ所に二度と沈むことは決してない。〔その身体は〕腐った頭蓋骨が浮かぶ泥沼を具え[23]、飛散している一続きの腸でいっぱいで、〔そこに堕ちた者の〕姿が醜く変わって行くことを免れない地獄に他ならない[24]。」

[9] ヴァーサヴァダッターの預流果獲得

etad ākarṇya gaṇikā duḥkhodvegavirāgiṇī |
puṇyaṃ ratnatrayaṃ śāntyai śaraṇyaṃ śaraṇaṃ yayau ‖ 72.37 ‖

etad ākarṇya gaṇikā dukhodvegavirāgiṇī |
puṇyaratna[292b1]trayaṃ śāntyai śaraṇyaṃ śaraṇaṃ yayau ‖

| e ta dā ka rṇṇya ga ṇi kā duḥ kho dbe ga bi rā gi ṇī |
| pu ṇya ra tna tra yaṃ shāṃ tye sha ra ṇyaṃ sha ra ṇaṃ ya yau |

| de dag thos nas smad 'tshong ma | | sdug bsngal gyis nyen chags bral can |
| zhi slad bsod nams dkon mchog gsum | | skyabs 'os dag la skyabs su song | 72.37 |

37b nyen] DPGN; nyan Z.

遊女はそれを聞いて、苦しみに恐怖を抱くようになり欲を離れ、寂静を得ようとして、身の寄せ場に相応しい尊き三宝を身の寄せ場にした[25]。

---

[23] この箇所は「身体と呼ばれるもの」(kāyābhidhāne) と「地獄」(narake) 双方を限定する場合、複合語解釈を異にする。前者を限定する場合 klinnakaraṅkapaṅka° を klinnakaraṅkaś ca paṅkaś ca「〔体液で〕湿った頭蓋骨と過失」による並列複合語に解す必要があろう。後者を限定する場合はこれを klinnāḥ karaṅkā yasmin sa paṅkaḥ「腐った頭蓋骨が浮かぶ泥沼」という同格限定複合語に解さねばならない。但し前者の場合 paṅka が「道徳的過失」の意味で用いられる用例は kośa 類に限られる点に問題が残る。

[24] cd 句に対応する Tib. は de dag lus zhes brjod pa'i dmyal ba dman pa'i keng rus dra bas gang gyur cing rgyu ma'i 'phreng ba rgyas pas dkrigs pa'i rnam 'gyur snod du slar yang lhung mi 'gyur「無残な骸骨の骨組みに満ち溢れ、夥しい量の一続きの内臓で心を惑乱させる、醜く姿が変わって行くことを味わわねばならない身体という地獄に二度と堕ちることはない。」であり梵本と細かな点で一致しない。梵本の klinna° に相当する語が dman pa (*hīna)「欠いた」、「貧しい」と意訳されており、paṅka に相当する訳語が dra bas (*puñja)「集まり」となっている。

[25] cd 句に śāntyai śaraṇyaṃ śaraṇaṃ という〈頭韻〉が適用されているが、同種の例は二大叙事詩や初期の美文作品に顕著に現れる。*Raghuvaṃśa* (『ラグの系譜』) 第 15 章第二詩節の例を挙げれば次の通りである (テキスト及び詩節頁番号は Shankar P. PAṆḌIT ed., Bombay: Government Central Book Depôt, 1874 に従う)。

[*Raghuvaṃśa* 15.2]

upaguptakathāvāptaśrotaḥprāptiphalātha sā |
dharmamārgapraṇayinī dṛṣṭasatyā vyapadyata || 72.38 ||

upaguptakathāvāptaśrotaḥprāptiphalātha sā |
dharmmamārgāpraṇayinī dṛṣṭasatyā vyāpadyata ||

| u pa gu pta ka thā bā pta shro taḥ prā pti pha lā tha sā |
| dha rmma mā rga pra ṇa yi nī dri ṣhṭa pa tyā byā pa dya ta |

38b °prāpti°] AEDZ (DE JONG); *°prāpta° Ex conj. Ed.

| de nas de yis nyer sbas kyi | | gtam gyis rgyun zhugs 'bras bu thob |
| chos kyi lam la gus pa yis | | bden pa mthong nas shi bar gyur | 72.38 |

38a yis] DZ; yi PGN. **38b** gyis] DZ; gyi PGN. **38c** yis] DZPN; yi G. **38d** shi bar] DZ; zhi bar PGN.

そして彼女はウパグプタが語ったこと〔を聞いて〕預流果を得、仏法という道を切実に求める者となって、〔四聖〕諦を見て息絶えた。

[10] ヴァーサヴァダッターの天界再生

tasyāṃ devanikāye 'tha saṃbhūtāyāṃ prabhāmaye |
mathurāvāsinaḥ śrutvā cakrus taddehasatkriyām || 72.39 ||

tasyāṃ devanikāye tha saṃbhūtāyāṃ prabhāmaye |
mathurāvāsinaḥ śrutvā cakru[2]s taddehasatkriyām ||

| ta syāṃ de ba ni kā ye tha saṃ bhu tā ya pra bhāṃ ma ye |
| ma thu rā [473b1] bā si nāḥ shru twā tsa kru sta dde ha sa tkri yāṃ |

| de nas de ni lha yi tshogs | | 'od dang ldan par skyes pa dag
| bcom brlag dag na 'khod rnams kyis | | thos nas de lus spyad pa byas | 72.39 |

39b 'od] PGN; 'dod DZ.

そして彼女が光輝に溢れる天界に生まれた時、マトゥラーの住人達は〔この一件を〕耳にし、彼女の体を手厚く葬ったのであった。

---

lavaṇena viluptejyās tāmisreṇa tam abhyayuḥ |
munayo yamunābhājaḥ śaraṇyaṃ śaraṇārthinaḥ ||

悪魔ラヴァナに祭式を台無しにされたので、身の寄せ場を求めて、ヤムナー河に棲む聖者達は身の寄せ場となされるべき彼 (= 守護者ラーマ) の所へ行った。

尚、当該詩節 c 句のśaraṇyaṃに対して Mallinātha は*śaraṇyaṃ* śaraṇārhaṃ rakṣaṇasamarthaṃ (439.14–15) (「身の寄せ場となされるべき、つまり身の寄せ場に相応しい、〔自分達を〕守ることの出来る〔彼 (= 守護者ラーマ) を〕」) という説明を与えており、Av-klp 第 37 詩節の文脈にも適合するのでこの解釈を採用する。

参考文献

BAREAU, André 1993 "CR. de John S. STRONG, *The Legend and Cult of Upagupta*," *RHR* 210-4, pp. 478–480.

DE JONG, Jan Willem 1995 "Rev. of John S. STRONG, *The Legend and Cult of Upagupta*," *IIJ* 38, pp. 280–282.

DIMITROV, Dragomir 2002 *Mārgavibhāga Die Unterschiedung der Stilarten*: *Kritische Ausgabe des ersten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyādarśa und der tibetischen Übertragung Sñan ṅag me loṅ nebst einer deutschen Übersetzung des Sanskrittextes* (= IndTib Bd. 40). Marburg: IndTib Verlag.

DURT, Hubert 1993 "CR. de John S. STRONG, *The Legend and Cult of Upagupta*," *BEFEO* 80-1, pp. 305–306.

FORMIGATTI, Camillo 2005 "Love as an Example for 'Skill in Means' in Buddhist Poetic Literature," in *Love and Nature in Kāvya Literature ed. by Lidia Sudyka* (= CIS 7). Kraków: Księgarnia Akademicka, pp. 155–173.

GEROW, Edwin 1971 *A Glossary of Indian Figures of Speech*. The Hague · Paris: Mouton.

HARTMANN, Jens-Uwe 1987 *Das Varṇārhavarṇastotra des Mātṛceṭa* (= Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen Philologisch-Historische Klasse Dritte Folge Nr. 160). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

RAGHAVAN, Venkatarama 1942 *Studies on Some Concepts of the Alaṃkāra Śāstra* (= The Adyar Library Series vol. 33). Madras: The Adyar Library and Research Centre.

SHARMA, Santosh Kumari 1966 "Rhetorical Embellishments in the *Haravijaya*," *JGJRI* 22, pts. 3-4, pp. 203–235.

STRAUBE, Martin 2006 *Prinz Sudhana und die Kinnarī*: *Eine buddhistische Liebesgeschichte von Kṣemendra Texte, Übersetzung, Studie* (= IndTib Bd. 46). Marburg: IndTib Verlag.

—— 2009 "Dharmakīrti als Dichter," in *Pāsādikadānaṃ*: *Festschrift für Bhikkhu Pāsādika hrsg. von Martin Straube, Roland Steiner, Jayandra Soni, Michael Hahn und Mitsuyo Demoto* (= IndTib Bd. 52). Marburg: IndTib Verlag, pp. 471–511.

STCHOUPAK, Nadine 1968 *Uttararāmacarita*: *La Dernière Aventure de Rāma* (= Collection Émile SENART). Paris: Société d'édition «Les belles lettres».

STRONG, John S. 1992 *The Legend and Cult of Upagupta*: *Sanskrit Buddhism in North India and Southeast Asia*. Princeton: Princeton University Press.

上村勝彦 1999 『インド古典詩論研究—アーナンダヴァルダナの dhvani 理論—』(= 東京大学東洋文化研究所報告) 東京: 東京大学出版会.

川村悠人 2013 「美文論書 *Bhaṭṭikāvya*—その研究と方法—」(『哲学』第 65 集 pp. 119–133)

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文 1990 『梵語仏典の研究 III 論書編』京都: 平楽寺書店.

引田弘道 2004 「アショーカ王物語 (その一)」(『人間文化』第 19 号 pp. 227–256)

松村恒 1992 「アショーカ王伝の構成」(『印仏研』41-1, pp. 455–459)

(やまさき　かずほ，日本学術振興会特別研究員)